
異世界漂流記

明鏡 桜花

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界漂流記

【Nコード】

N8125J

【作者名】

明鏡 桜花

【あらすじ】

いつものように、バカやって、笑って過ぎていく。そう思っていた、だけど、まさか俺たちがあんなものに巻き込まれてしまうなんて思いもなかった・・・。

普通の高校生だった少年少女がいきなり異世界に飛ばされてしまう。そんなお話です。・・・たぶん

その間に、ちょっと読んでみて面白かったラノベの二次作品を投稿しようと思います。ただ、もしかしたらこちらの完結のほうが先になるかも知れないです。プロットなくしたし・・・。

最悪の事態に発展しました。もともとプロットの紛失もPCの不調が原因だったわけですが、限界に達したのかほぼすべてのデータ、記録が消し飛びました。なので、更新にはまだしばらくかかると思います。今後は、フラッシュメモリに記録するようにします。

二次作品のプロットが十話分ぐらい、二つ出来ましたね。そのうちあげます。この作品のプロットは現在復元段階です。そろそろ続きに入れるかと思っています。

(1)「現代編」七月一日 前篇

俺こと鮎川^{あゆかわこう} 甲は普通の高校生だ。

どこかの小説みたいに幼なじみが居たり、非日常ど真ん中だったりするわけでもないし、この世界も至って普通だ。

つまらない。

そう感じてしまうくらいに。

だけど、俺は多分、非日常だとかそんなものは断じて望んでない。

まあ、幼かった頃はそういうのにも憧れはしたが、高校生にでもなるとこんな風に考えるようになる。

そういうことが起きてても、ゲームではないのだからダメージ受けたら死ぬだろ、死ぬのはイヤだからゴメンだ。

こんな感じに。これは、俺の意見だから全人類に通用するとは思わないが、大多数の人の意見の根幹にはあると思う。

だから、まさか自分が本当に異世界に飛ばされるなんて思ってもみなかった。

今思えば、あの時から何かが動き出していたのかもしれない。

朝7時。

いつも通りに起床することに成功した俺は、朝御飯を食べていた。

「あんたねえ……。いい加減に、朝からカレーパン食べるのやめなさいよ」と我が母。

「そんなこと言われても……。母さんも食ってみれば？」

「私が言いたいのは数の問題だよ。何で3個も食つかね……」

おいしいんだからしょうがない。

その後もぶつぶつと言ってくる母さんに応対しながら、学校へ行く準備をする。

そして、玄関にまでくると

「ほい、弁当」

「ああ、どうも。んじゃ、行つてきまーす」

「はいはい、いつてらっしゃい」

さて今日もがんばりますか。

成城学園成城高等学校。

それが、俺の通う高校だ。進学校というほどでもないが、結構進学率は高い。比較的自由な校風のため、個性的な奴が多いのは否めない。

そして、今日は七月一日。

夏休みまで残すところ今日を入れて二週間。この学校は、なぜか学園行事、もしくは学園記念日みたいなのがやたらこの時期に多い。そのために、夏休みもほかの学校に比べるとだいぶ長い。

教室にはいると

「おはようさん、甲」

「よっ、甲」

「・・・おはようだ、甲」

裕二、ハル、二ノが居た。

「おっす。また、裕二はこっちの教室にいるのか」

「だってよ・・・」

「・・・あまりにうるさいので必要最低限、教室にいないように義務づけられたらしい」

「だから、こっちに来るのか」

「ひどいと思わないか!」

「・・・思わん。むしろ自業自得だ」

「ひどつ!!」

うわああああん、お前等なんか嫌いだゝ……。と叫びながら走り去っていく裕二と入れ違いにいぶかしげな顔をした高瀬が入ってくる。

「……ねえ、あれ何」

「さあ？気にしないでいいんじゃない」

ハルが答える。

ふじまきはるめ

にのみやけん

藤巻 春雨、二ノ宮 謙吾は俺の友達だ。周りからは、なぜか三バ

カと言う不本意な評価を受けている。そして今、話しかけてきた眼

鏡をかけた少女。高瀬 たかせほのか 穂香は二年連続で同じクラスだ。比較的、

静かな方でどこかのバカとは大違いだ。ちなみにあいつの名前は・

・確か、小野 おのゆづ 裕二だったはず。

「……ふゝん。まあ、いいけど。……そういえば知ってる？B

クラスに転校生が来てるらしいよ」

「ふゝん……。そういえば担任がそんなようなことを言っていた気がする」

「……俺たちに関係はあるまい」

「そうだね」

うつわ、何この三人めちやくちや冷めてるし、とか言いながら自分の席に向かう高瀬。こいつも十分に冷めてると思うんだが、誰か同じように感じた奴はおらんのか？

ふと、周りの会話に耳を傾けてみると

「……お嬢様……」

「神宮寺……」

という声が聞こえてきた。

「神宮寺……。どこかで聞いたことがあるような、ないような」

「……。確か、どこかの財閥の名前の一つがそんなのだった気がするぞ」

「よく知ってたな、二ノ」

「……俺でも新聞くらいは読むさ」

そういう事じゃなくて、覚えていたことに感心したんだよ。こいつはさっきも言ったように、頭が悪い。ハルもそうなんだが、どうしてこのバカ二人と比較的普通な俺が比べられねばならんのだ。

「日本どころか世界でも五本の指にはいるくらいの財閥だからね。知っててもおかしくはないんじゃないかな」

鞆をおいてきたのか、高瀬がこちらに戻ってきてそういう。

「まあ、それは置いといて何でこんな学園に？」

俺たちが通っている成城学園は至って、普通の学校だ。強いて言うなら、敷地面積が若干広いぐらい。

「・・・さあ？」

「俺たちに聞くんじゃない」

「ごもつともで。」

「昼休みにどうせ間宮も生徒会室に来るんだろう？その時に何か知っていれば聞けばよからう」

「だね」

「そうね」

「・・・自分で調べにいかずに他人任せって・・・まあ良いけどさ、俺もそうだし。」

その後、睡眠三時間、起床一時間というかなり不真面目に授業を受けた。一時限真面目に受けたのは、体育。この学園の体育教師はかなり有名で、もし寝ていようものなら居残りで、学園敷地内百周を課せられるらしい。やったことないから知らないが、先輩で過去にマジでやらせられたことがあるらしい。ちなみに、学園一周するのに二十分はかかる。

そして昼休み。

「ういゝ、やっと終わったよ・・・」

「ああ・・・体育のある日は苦痛だ」

「お前等、ほかの授業も真面目に受けるよ」

「しょうがないじゃない、三バカだもの」

「だから俺を入れるなと・・・」

「いよーす、裕二様が来てやったぞお前たち」

「ご機嫌よう、穂香」

言うんだ、と言うおうとしたところで裕二とリスに遮られてしまった。
リースリット・エル・ラバーニヤ。

何か変な名前だが、これでも一応英国貴族のご令嬢。転校してきたのは一年の時なんだが・・・あの時の未だに衝撃的だ・・・まあ、考えるのはよそう。だって、今もなんかものすごい睨んできてるもの。俺、何かしたかなあ？

「・・・と三バカ」

「そんな、いやそうな顔して言われても・・・」
俺がそういうと

「ふんっ、別に嫌なんて一言も言ってますんわ」
ますます不機嫌そうな顔つきになりそうだった。説得力ゼロだが、まあぶつぶつ言ってもしょうがないし、無駄に時間を浪費するだけだ。

「まあ、いいか。んじゃ、集まったようだし、生徒会室に行くか」

『おう（ええ、はいはい）』

俺、二ノ、ハル、裕二は最初教室で男四人寂しく飯を食っていたんだが、裕二がうるさいおかげでもの凄い白い目で見られるようになった。まあ、セクハラ発言が多いからな。

そこで、どこか周りに迷惑にならないような場所はないかと探していた時、生徒会室ならどうか？という事になり、今に至る。裕二を切り捨ててもよかったが、もっとうるさいことになるのは目に見えていたからな。

とはいえ、初めから何人も居たわけではない。初めはさつきも言ったように四人、そこに生徒会会長である一ノ瀬いちのせ葵あおいが加わり、その次に間宮まみやう冬子ふゆこと高瀬たかせが担任から俺に伝言を頼まれたとき加わり、

リズは暴漢というかチンピラに絡まれているところを俺が助けて、そのお礼を言いに来たときから加わった。

そんな感じで気づいたら八人という大所帯になっていた。

まあ、楽しいからいいんだけどね。

「そっぴやさ、リズは転校生について何か知ってるの？」

そう高瀬が尋ねると

「よくは知りませんね。財閥の名前くらいなら知っていますけど、その他のことは皆さんと同じようなものです」

リズがそう答えたとき、ちょうど生徒会室に着いた。

ガラガラ、と扉を開けるとすでに会長が来ていていつもの如く、窓側の一番いい席を陣取っていた。

「ふむ、全員お揃いのようなだな」

「まだですよ。間宮が来てませんって」

ん？そっぴだっただか、と言いなから紅茶（？）を飲んでいる。

「・・・いい加減、ここに来る人間くらい覚えたらどうなんだ」

そっぴいう二ノに同調するかのようハルが

「そっぴですよ、会長。いくら興味ないからって・・・」

酷すぎるでしょう、と言おうとしたが会長に手で制される。

「ちよっとしたジョークだろう。本気で忘れていたわけではないさ」

「ならいいですけど・・・」

「・・・相変わらずのドスっぴりですね」

「ふふふ、甲君。それは、僕をもっといじってくださいという君なりのアピー・・・」

「んなわけねえでしょうが」

「どうでも良いが、甲。お前その話し方敬ってるのか敬ってないかどうかっぴなんだ？」

マジでどうでも良いな、オイ。

そんな風にバカをやっていると、

「いやゝ、すいません！遅れちゃった！」

もの凄いい勢いで間宮が扉を開けた。そのせいで、扉の前にいた裕二

が吹っ飛んで、ピクピクしてるけどまあ、いつか。

「よくねえよ!!!」

何だよ、心読めるのか？お前。

俺、何もいってないよ？

「雰囲気で何となくわかるんだよ!!!」

「別に無傷なんだし・・・」

「・・・ああ・・・って、納得できるか!!!」

さて一通りコント（？）も終わったことだし、何事か聞いてみるか。

「んで？そんなに慌ててどうしたよ」

「あ、うん。実はさ・・・」

間宮の話をまとめるとこういう事らしい。

今日、間宮のクラスには転校生が来た。まあ、それはみんなが知っているから良い。が、ここで問題が発生した。この転校生がお嬢様な上にかんりの美少女。当然、男子連中が黙っているはずがない。

そして、その話は半日でおよそ全校に知れ渡ってしまう。誰が広めたか知らないが、これがいけなかった。その話を聞きつけた男子と言う男子が、昼食と一緒にとらないか、とお誘いして来るものでまともにご飯が食べられない。見かねた間宮がその子の手を引っ張って、ここまで連れてきたというわけらしい。

「ふ〜ん・・・それで？その子は？」

「あ、あの・・・も、申し遅れました。この度、この高校に転校してきた神宮寺結衣（しんぐうじ ゆい）と申します。以後、よろしく願いします」

あ、噛んだ。

「・・・」

何ともいえない沈黙が降りる。

これはいけない。相手が必死なもんだから、笑い飛ばせないし、フオーするのにもタイミングがつかめない上に、最後で噛むんだものスルーもできない。

だが、さすがはバカ。この空気を見事にぶち壊してくれる。

「来たよ、俺の春!!!!!!」

そついうと同時にその女の子へ突撃。

「え、え、ええ??」

戸惑う彼女に、

「僕とお付きあ・・・うごほっ!？」

告白しようとして、間宮に鳩尾への痛烈なパンチを食らっていた。

「き、貴様・・・また人の恋路を・・・」

「・・・うるさい、人類の敵」

「!!!!」

ドサツ、と心身共にぼろぼろになった裕二が床に崩れ落ちるが誰も手を貸そうとはせず、

「それで、この子も仲間に入れてあげられないかな?別に嫌って言うなら、他を当てるんだけど・・・」

「ふむ、まあ確かにこの連中のそばにいれば、まずそんなことにはならんだろうな。我々相手につつこんでくる奴など学園には居るまい。・・・私は良いと思うが」

「ありがとうございます、先輩」

「しかし、他の連中は知らんぞ?」

「別にとくに断る理由はありませんよ」

「私もリズに同じく」

「高瀬達が良いならいいだろう」

「俺も二ノと同意見」

「うん、ありがとう。みんな」

「ありがとうございます」

いくらか緊張がほどけたのか、今度は嚙まずにそついう神宮寺さん。そこで傍観していた俺に視線が集まる。

「・・・まだ、この場におけるリーダー格の承認を得てないんだけど・・・?」

「は?リーダー?俺が?」

みんなが頷く。

「会長じゃないのかよ」

「もともと、この集まり自体、君が始めたと言っても良いくらいだろう？なら君がリーダーに適任だ」

「はぁ・・・」

なんかそれっぽいこと言って、全責任を俺に押しつけた気がするんだが・・・。まあいいか。

「・・・別に良いよ。今更、一人増えても構わんさ。ここに寝てるアホは無論のこと、俺たちは歓迎するぜ。ようこそ、神宮寺」

「いきなり呼び捨てですの・・・」

「うるせえな、もう友達なんだからいいだろ？それとリズ、口調戻ってんぞ」

「う・・・」

何かいきなり突っかかってきたリズにそう返す。

「まあ、ともかく全員一致で歓迎ってことでいいんだね？」

そう高瀬が尋ねてくる。

「おう」

「さすが、甲」

「ありがとうございます、・・・ええっと」

「ああ、自己紹介まだだったな。俺は鮎川 甲。呼び方は何でも良い。一応、生徒会の会計だ」

「俺は、二ノ宮 謙吾だ」

「藤巻 春雨だよ」

「・・・んで、転がってるのは小野 裕二」

「私は生徒会長の一ノ瀬 葵だ」

「私、高瀬 穂香っていうんだ。穂香って呼んでね」

「私は、リースリット・エル・ラバーニヤと言います。どうぞ気軽にリズと呼んでくださいね」

「あ、あう。ご、ご丁寧にどうも。よ、よろしく願います」

「一通り自己紹介が終わったところで、飯にしようぜ。腹減ったし、時間なくなっちゃう」

とりあえず昼食をとることに。席の順番はいつも通り、会長席には

会長、その左前に俺、そこから反時計回りにリズ、ハル、高瀬、間宮、祐二、二ノ、そして新しく来た神宮寺さん。

「にしても、すっかり大所帯になっちまったなあ・・・」

「そだね。初めは男子四人だからね」

「・・・それもこれも、祐二のせいだな」

「う、悪かったな。でも、女の子もいっぱい入ってきたんだし、文句無いだろ？」

お前のそういうナンパなところが、追われる原因なんだよ。いい加減気付け。まあ、確かに本音としては美少女と呼べる奴らと一緒に居るんだから、嬉しいっちゃあ嬉しいが・・・。それとこれとは別だろうが。

「別に・・・」

とまあ、本音は語らないがね。

「僕もあまり興味ないなあ・・・」

「・・・お前だけだ、祐二」

他二人にも突っぱねられた祐二は

「・・・く、くっそ～～！！！！お前等それでも男かよ！」

『・・・男だが？（だけど？）』

う、うわああああああん、ちきしょ。

とか言いながら、机に突っ伏して嘔泣きをしている。

「・・・いつもながら、一人だけ噛み合わないわね」

「半分くらい、嘘だと思うよ？」

「え？じゃあ、じゃあ、ちゃんと女の子に興味あるって事？」

「ふん、そうだろうな。特に甲君はそうだろうな」

『ふ、ふん。そ、そうなんだ・・・』

ん？何をこそそと喋ってるんだ？

「しかし、残念ながら甲君はすでに私にメロメロさ。放課後残って甲斐甲斐しく働いてくれるからな」

「・・・ふん、そうですの」

「・・・あははっ」

「・・・へえ・・・」

「あ、あの皆さん・・・？」

む！なんだ！この殺気は！？もの凄く嫌な予感がする。何かとてつもない勘違いをされている気がする・・・。

ガシッ！！

そこまで考えたところで、突然背後から肩をつかまれた。そして、恐る恐る後ろを振り向くと

「「「・・・（にこお）」」」

般若がいた。

やばい、これは閻魔もびつくり尻尾巻いて逃げ出せず。うむ、もしくは悪魔でも・・・。

「「「ちよつと、外で話、詳しく聞こうかしら・・・」」」
良いかも・・・。

とか、そんなこと考えてる暇なんかありはしないっつーか

「か、会長！貴方何いったんですか！！」

思いつきりにやにやしなからこつちを見る会長に、三人に引きずられながら言つと

「何も？」

なわけねーでしょうよ！！

ガラガラガラ、ガラガラガラ、ピシャ。

「はあ！？じゃあ！こいつらは、なんでこんな・・・ってちよ！まつ・・・ぐお！？え？いや、それは流石に洒落になんないよ？うわつ、ちよ・・・アーーーーーッ！！」

扉の閉まる音とほぼ同時に、全校に可哀想な少年の断末魔が響いたとき。

(1)「現代編」七月一日 前篇(後書き)

どうも、何とまさかの三作同時連載

甲「バカじゃないのか？」

自覚はしてるよ

甲「なおさらやばいだろ・・・」

うん、せめてどっちかのプロットが完璧ならね

甲「だめなのか？」

うゝん、何というか・・・つなげづらいからなあ・・・

甲「想像するエンディングに？」

うん

だから、異世界放浪記では試験的にやってみようかと思ってる

甲「何を？」

うん、たまに外伝的なものを挟む

甲「まあ、確かに今まではなかったけど」

その代わりに後書きみたいな感じだったしね

甲「それに、何か後書き書くと読む人増えてたしな」

・・・うん、後書きに定評？のある人だから

まあ、そんな感じだね

甲「じゃあしばらくは、これ一本？」

うん完結はいつになるかまだ未定だけど

甲「エンディングは用意してあると？」

うむ

甲「そうか、んで？次回の後書きはキャラ紹介になるのか？」

察しがいいな

甲「どこかで言ってたじゃん」

うんまあ、・・・いいか。じゃ、次回は・・・定期は金曜、突発的に上げる時もありますますがよろしく

(2)「現代編」七月一日 中編

「・・・いてえ」

あの後、口に出すのも恐ろしい罰を受け、昼放課が終わり、午後の授業も受けてしまった後。

何とか誤解を解くことには成功したものの、全身がミシミシいうほど十字固めを食らい、ズタボロにされた為、体中悲鳴を上げている。そんな俺を見て、さすがに申し訳ないと思ったのか

「だ、だから、申し訳なかったと・・・」

「・・・ごめんね」

「・・・すまん。まさか、あそこまでやるとは・・・」

「悪かったよ・・・」

と会長も謝ってきた。

「はあ・・・。もう良いですよ、でももう二度と勘弁ですよ」

「ええ、今度はもう少し軽めにやってます」

「そうね」

「うん」

「うむ」

意味が違っ！軽くやっても痛いだろうが！それと会長、あんた反省してねえな！！

「・・・相変わらず、もてるねえ、甲」

「ああ」

ハル、二ノ。これをモテるとか言うなら、そんなものいらないと俺は言える。

「ははっ、確かにさすがに勘弁したいかも」

「・・・まあ、甲以外には務まらん役だ」

そんな役、是非辞退したい。

そして、なぜ俺の心の声が聞こえる。

「というか、祐二は？」

「・・・私たちが知るはずあるまい」

そう会長は首を振り、

「僕も知らないな・・・、二ノは？」

「俺もハルと同じだ」

「・・・あいつは居たらいたでウザいんだが、居なかつたらいなかったで不安を誘う。」

経験上、こうやってあいつが前触れも無くいなくなるときは必ずと言っていていいほど厄介事を頼んでもないのに、持ってくる。

「どうせまた、厄介事でも作ってるんじゃないかな？甲のために俺のためにとは、またありがたいこつて。」

「まあ、よからぬ事であることには間違いない」

「・・・なあ、俺ってそんなに分かりやすいのか？」

「分かりやすい、って言うか・・・」

「・・・お前は聞こえてないつもりだろうが、声にでている」

「・・・マジか・・・」

「大マジだ」

今日は生徒会の定例会議のために、他の生徒会役員が来るためリス達と一緒にいつまでもだべっているわけにもいかず、取りあえず今日のところは帰宅しろとの会長の言葉でリス達は帰っていったが、俺と二ノ、ハルは会議に出るため残っていた。
するとそこに、アホが飛び込んできた。

「どわあああああ、つと・・・ふう、今回は危なかった・・・」

「何してたんだ、お前」

「追っ手から逃げた」

「・・・」

三人、沈黙。

「いや、意味が分からん。笑うところか？今の」

「何で笑うんだよ!!」

その問いに二ノはあつけらかんと、

「そっちこそ愚問だな……。お前だからだ」

「ああ、そっかあ！それじゃあ、しょうがない……。なんて言う訳ねえだろこんちくしょう！」

ノリつつこみを覚えたのか……。進化って思ったより早いんだね。

「こるあ！失敬なこと考えてんじゃねえよ！」

「あーあー、わかったわかった。まあ、今は取りあえず席に着け。会議が始まるから」

「……。そういえばそうだったな」

急に大人しくなる祐二。

こいつ曰く、「会長だけはダメだ……。冗談でも言ったら確実に実行される。……。なぜかそんな気がする」らしい。……。まあ、ようするに天敵なわけだ。

確かにあの会長の性格から言って、有言実行。しかも、即実行、という感じがする。

そんなことを考えていると、他の役員及び会長がやってきた。

「にしても、今日ってなんか話し合う内容有ったけ？」

ハルがそう聞いてくるが、

「俺は知らん」

「さあ？」

「このアホへの苦情じゃないか？」

ああ、そうか。

という顔をしたハル、二ノに向かって

「お、お前等なあ……。いくら俺でも生徒会に迷惑はかけてないって……。これ以上こき使われたらたまねえもん」

そう俺は会計という肩書きがあるが、こいつらは庶務。つまり、会長が任意で何人でも選出できる。

しかし、ここは仮にも生徒会。こんなバカが居ていいのか？と思うかもしれないが、体力だけは無駄に余っているようだからパシリに

はなるので採用したらしい。・・・何という差別。

・・・まあ、俺は関係ないからいいんだが。

「じゃあ、何だろうな・・・。また面倒な事言わなきゃ良いけど、なんか楽しげだったからなあ・・・。あの人が楽しんでいるときは、普通の人の感性から言って恐怖とかだからな」

「ああ、たまに本当に人間なのか疑わしくなるぜ」

「・・・それ本人の前でいったら殺されるぞ」

はああああ、と二人してため息なんかついていると

「二人とも良いから来なよ・・・」

「俺たちだって行きたくないのは山々だがな、行かんわけにもいかなだろ？・・・後で、なにされるかわかったもんじゃないからな」
二ノがそこまで言ったところで会長が入ってきたため俺たちは静かになった。

「では、会議を始める。書記、議事録は任せた」

そして会議が始まる。

俺たちにとって、今年度最後になるとはこのとき思いもしなかったが。

(2)「現代編」七月一日 中編(後書き)

どうも、予定通り上げられて安心

甲「少し短いかな」

うるさいな

甲「んで？今日は誰を紹介するの？」

ふ、もちろん！・・・人数が多くなりすぎて、プロットの段階だと訳わかんなくなっちゃてる、リーズリットだ

リズ「ちょ、何か不安を誘う発言してるんですが！」

甲「気にするな」

く、何か主人公、及び登場人物からの俺への評価が軒並み低いだと・・・！？

リズ「いつものことではないですか？」

・・・まあいいけど。とりあえず、メインヒロインさん自己紹介してくれ

リズ「はいはい。私はリーズリット・エル・ラバーニヤ。英国出身の一応貴族ですわ」

はい、どうも

甲「ふと、思っただがイギリスってまだ、貴族いるのか？」

現実で？

甲「うん」

作者の頭の中ではあることになってる

リズ「そんな妄想ばかりしているような脳に知識があるんですか？」

うぐう・・・。

そ、そんなことよりリズの口調はどうなってるんだよ

リズ「(話をそらしましたわね)一応お嬢様言葉ってことになってるんじゃないんですか？」

いや、我を忘れると出てくる感じ

甲「初めはお嬢様口調だったもんな。・・・あれ？どうしてそんな口調に変えたんだ？」

リズ「そ、それは・・・（あなたが変な口調とか言うからですわ！）」

・・・自分で設定したとはいえ鈍感スキルはやり易いな・・・そしてツンデレも・・・

リズ「何かおっしゃって!？」

???

やばい、キャラ崩壊だ!とつとと幕閉めろ!

甲「お、おう!じゃあ、また金曜までごきげんよう!」

お前もそんなキャラじゃねえだろ!!何だよ!ごきげんようって!
!

(3) 「現代編」七月一日 後編(前書き)

すいません中途半端、かつ更新が遅れました。

事の顛末は外伝としてやろうと思います。

本編一向に進まないから・・・

(3) 「現代編」七月一日 後編

結局、会議は何でもない予算会議だった。どうしてこれが緊急の用件になるのかと思い、会長に聞いてみると

「・・・いや、そうすれば必ず来るしかあるまい？お前達は私が雑務を押しつけようとする、真っ先に逃げていくからな」

「え？それだけ？」

目の前に大量の雑務、まあ要望書や嘆願書までいろいろあるんだがそれをドンツと置かれた。

何の追跡かは知らないが、必死に逃げてまで会議に出席してる祐二が隣で固まっていた。・・・ザ・ワー。ド？

「それだけ、だと？」

「あ、い、いや、違うんですよ？別にもっと雑務がほしいなんて言っでは・・・」

「ほほう。ついに小野君、君にも私の下僕としての自覚が出てきたようだね。嬉しい限りだ。よって、これは褒美だ。ありがたく受け取りたまえよ」

そういうと会長は、俺、二ノ、ハルの目の前に置いた雑務を五分の四ずつぐらいとすると祐二の雑務の上に乗せた。

・・・山になつてるよ。

「・・・」

祐二は祐二で石になつてるし。

「まあ、頑張りましたえ。・・・逃げたらどうなるか、わかっているな？」

「さ、さーいえっさー」

やっぱりこの人は鬼だ。そう俺たち三人が再認識した瞬間だった。ちなみに、祐二はその後十分後くらいにようやく再起動した、というかショックから復帰した。相変わらず切り替えの早い奴だ。

「・・・やつと終わったな」

「ああ、ようやく解放さあれる」

「うん、さすがの僕も疲れたよ」

俺の言葉に二ノとハルがそう返してくる。

あの後、結局俺たちはすべての雑務を片づけるまでに約二時間掛かった。

「・・・なあ」

「んじゃ、帰るか」

「だね」

「ああ」

「なあっ！ってかお前等友達がまだ仕事やってるのに帰るのかよ！」

祐二がそう叫び

「小野君、そうはいうが後できちんと仕事の量は均等にしてやったが？」

会長の言葉に一瞬怯むが今日は珍しく反論した。

「で、ですがちよつとは手伝ってくれるっていう優しさを見せてくれれば嬉しいな、なん・・・て・・・」

そこまで言つて、突然黙り込む祐二。何やら会長の方をみて固まっているが・・・。あ、顔色がどんどん悪くなっていっている。

「そ、そうですね！自分の仕事、ノルマは達成しなきゃいけませんよね！！」

あ、負けた。

「ああ、その通りだよ。しかしまあ今日は、ここまでにしておう」「へ？」

そう会長が言った。祐二はというと珍しく会長が譲歩したのでこれ

は何かがある、と思ったのかガタガタ震えだした。・・・こいつはなにがあると想像したんだ。

「何に怯えているのかは知らんが・・・、まあ君のかがえているようなことではない。携帯をみてみればすぐにわかる」

携帯？という顔も俺たちもしたので会長は呆れたように、

「はあ・・・つまり君らはこのままだったら、普通に帰っているところだったわけか」

そついうと携帯をこちらに向けて見せてくれる。

『会長さんへ』

今日は神宮寺さんの家で歓迎会？みたいなことをやることになったのでよろしく願います。あ、あとそのバカ四人にも言っておいてください。一応メールしときますけどどうせ、面倒だとか言つてこなさそうですし、無理矢理引っ張ってきてください。では校門のところで待ってますので』

「・・・バカ四人って？」

「当然僕らの事じゃないかな？」

「・・・それ以外に該当する人がいない」

「ひつどい言われよう・・・」

全文を読み切つて俺たちがそう口にするとう会長が

「まあそう言うわけだ。言っておくが、君らに拒否権はない。おとなしく捕まつて、強制連行されることだな。逃げたら、そうだな・・・君らの苦手な体育教師と個室補習というのはどうだ？」

『・・・はい』

やつぱりこの会長は、・・・鬼畜だ。

そんなわけで今は、校門のところで合流したりズ達含め九人で神宮寺さんの家にお邪魔しているわけだが

「・・・なあ、二ノ」

「なんだ？」

「俺たち場違いなところに来たもんだよな」

「奇遇だな。俺もそんなことを思っていた」

「こそそと二ノと話しているとハルが」

「僕もまさかここまでとは・・・」

「情報通のハルが知らないのに驚いてるのがお前達二人だけと思うなよ」

祐二、台詞は何となくカッコいい感じがするけどその間抜け面とあわせるとただの痛い子だぞ。

「うるさいよ！」

まあ驚くのは仕方がないと思う。だって、神宮寺の家の正門？らしきところから入って車で十分走って、ようやくたどり着いたのがこんなにバカでかい屋敷の玄関。そこから、更に歩いて十五分ではないたどり着いたのが、映画とかドラマやアニメでしかみたことのないような部屋。まあ、つまりなんだ・・・何って言ったらいいんだこの部屋・・・。

「その顔はどういう部屋がよくわからないという顔ですね」

「よくわかったナリズ」

「あなたが分かり易すぎるんです」
そうですか。

「・・・勘ねなくても良いじゃありませんの。ちなみに、この部屋はおそらくですが・・・」

とそこで言葉を切って神宮寺の方をみる。

「はい、その通りです。この部屋は主に賓客を招いたりして行うパーティーに使われる部屋です」

「部屋、というより私からすればホールなんだけど・・・」

安心しろ間宮。そう思っているのがここにいる人間のほとんどだ。

「しかし、本当に金持ちだな・・・。置いてあるものなんかみんなアンティークじゃないのか？」

「ええ、ここに置いてある壺なんかお爺ちゃんがみたら泣いて喜びそうな奴です」

「会長さんと高瀬さんは見る目がありなんですね！」

・・・高瀬、その驚き方はなんか間違ってると思う。

そして、会長は相変わらず御慧眼なこと。

「・・・なあ、あんていーく？ってなんだ」

「・・・ハル教えてやれ」

「えー、二ノが教えてやりなよ」

「バカが移る」

「じゃあ、僕だってイヤだよ」

「失礼だな！！お前等！！じゃあ、いいよ！甲に教えろ・・・」

「だが、断る」

まだ何も言っていないのに！！とか言いながら崩れ落ちるでしょうもないアホ、一名。

女子五人からも微妙な目を向けられている。

・・・一生そうやってろ。

そうしてワイワイやっていると、

「やあ、君たちが結衣のお友達かい？」

「？ ええ、まあそうですが・・・どちら様で？」

「おつと失礼、こちらから名乗るのが礼儀だね。・・・初めまして、結衣の父親であり神宮寺財閥現当主の神宮寺 じんくうじかねつぐ 兼継というものだよ。いやあ、さっそく結衣に友達ができるなんて喜ばしい限りだよ」

「はあ、どうも俺の名前は鮎川甲ですけど・・・って神宮寺のお父上ええ！？」

「ははは、お父上っておもしろい呼び方だね」

神宮寺の父親と俺がそんな風に第一次遭遇を果たしていると

「ん？どうかしたかい、甲」

「やあ、初めまして。結衣の父親の兼継というものだよ。よろしくね」

「はい、藤巻春雨っていいです。みんなからはハルって呼ばれて

いm・・・って父親？」

同じくハルも固まってしまった。

「おや？どうかしたかい？二人して固まってしまって・・・」

二人して固まっているとこちらの騒ぎを聞きつけたのか、みんなが集まってきた。

「うん？このおっさん誰だ？というか何でこいつら固まってんの？」

「・・・知らん」

二ノと祐二は気づいていないのか、いつもの調子でそんな風に言っているが会長達は気づかないはずがなく

「・・・ほう。さしずめ、娘に悪い虫が寄りつかないように駆除にでもしにきたのか・・・」

「・・・会長さんって相変わらずだよな」

「うん、何を前にしても動じないもん」

「お久しぶりですわ、神宮寺家当主」

「お、お父様・・・」

女子連中はみんな知っているみたいだ。

補足しておく、二ノと祐二は神宮寺のお父様発言で完全に固まっている。

「やあ、初めまして皆さん。そして、君は・・・リーズリット君かい！やあ、久しぶりだね。日本に来ていたとは聞いていたがまさか娘と同じ学校に来ているとは・・・」

そして、とそこで言葉をいったん切り、

「おかえり、結衣」

「はい、ただいま帰りました！」

そこで、ちょうどパーティー料理が運ばれてきて

「さあ皆さん、今日は私たちの主催です。存分にお楽しみください。あなた達の歓迎に心から感謝しています。これからも結衣をよろしくお願いします」

『はい』

ちなみに、俺たちが正気に戻ったのはその後十分くらいだった。

「何で誰も教えてくれなかったんだよ」

高瀬と間宮にそう言う

「いや、あれは教えてもらうもんじゃないでしょ」

「うん、普通に毎日ニュース見てれば、必ず一回は出てくる顔だよ」
「・・・そうか？」

「まああなたが教養不足なのは、今に始まったことではありませんし、問題ないでしょう」

「うんそうですね・・・って誰が納得するかい！！と言うよりリズ、ちよいと失礼すぎやしませんかねえ！？」

「失礼？何に向かつてです？」

「ええ！？そこは普通に俺だろ！！て言うか、何って俺はものかよ！」

「・・・・・・」

「んなイヤな顔すんな！！」

「まあまあ、夫婦漫才はその辺にして」

誰が夫婦じゃ！！という俺たちのツツコミは無視して間宮は

「お熱いのはいいけど、主役どこ行つたか知らない？」

「主役って・・・神宮寺か？」

「うん、さっきからほのちゃんと探してるんだけどどこにもいないわけですよ」

ねえ、と言つて隣の高瀬に目配せする。

「はい、結衣ちゃんのお父様が帰ってきたあたりまでは居たんですけど・・・」

「じゃあ、親子で何か企んでいるのではなくて？」

「企む？」

リズが突然訳の分からんことを言うてくるので、疑問を持つと

「・・・まあ社交界では有名な話なんですが、神宮寺家のパーティーでは必ずと言っていいほど何かしらの仕掛けがあるのですわ」

リズの口調が初期に戻りつつあるが、まあこのさい気にしないでおこう。

にしても仕掛けとな……。俺たちが来ることは結構急でそんなことをしている暇はなかったはずだけど……。

すると、リズは眉値を寄せて考え込む俺の顔から何を疑問に思っているのか悟ったのか

「……甲、ここは神宮寺家のいわばホームグラウンド。いつ何時のために何が仕掛けてあってもおかしくなくてよ」

「……たしかに」

てか俺たちは何をそんなに警戒してるんだろうね。さっきの父親の人柄から言ってそんなめちゃくちゃなことはしないだろうし、やってビンゴとか？ん？これはゲームか……。

そんなことを考えていると

『レディース・アンド・ジェントルメン。大変長らくお待たせいたしました！「ちょ、ちよっとお父様！」いいから、いいから！これから、ちよっとしたゲームをしたいと思います！内容は至極簡単、私の所までたどり着き結衣を助け出すこと。それでは、黒井にルール説明は任してある。ふっふっふ、さあ！来たまえよ諸君！』

そこで、音声は切れた。

……。

『はあっ！？』

「……まあいつも通りですわね」

俺たち全員が驚く中、リズは一人だけ訳知り顔で頷いていた。

まあ、仕掛けがあるとは言われていたが……。まさか、こんなRPGみたいな真似をする羽目になるとは思いもしなかったわけで、もうちょっとブルジョワジー的な仕掛けを期待してたんだが……。

俺たちが呆然としてみると、執事姿の人が（さっきの話からたぶん黒井さん）

「それでは皆様、御傾聴ください。ルールは簡単、この屋敷の中を

そこまで一気に説明すると、黒井さんは下がってしまった。

「うん」

「うん」

「うん」

「超展開すぎるだろ、これええええええええええ！！！」

「でも、なんかおもしろそうじゃん！」

「やるからには全力ですわ」

「なんだかわくわくしますよね」

ちなみに、会長は言うまでもなく真つ先にマシンガンをとっていた。

後残る武器は、拳銃、拳銃、拳銃、新聞紙。

危うくスルーしそうになったが、これは絶対に武器のチョイスがお

「..?」

「・・・最後のは絶対ネタだ」

「・・・僕イヤだな」

「そんな誰だってイヤだろ」

エクス。リバーっ！とでもやれと？

そんな人が居たら、即刻病院へ行くことをおすすめる。

「とりあえず祐二、お前がいけ」

「え」

「途中で出てきた、敵・・・と言うかメイドさんや執事の人から武器を奪えばいいだろ。得意だろそういうの」

まあ、そうだけど・・・ブツブツ・・・とか言いながらしばらくうなっていたが、

「分かった。やるよ、やればいいんだろ！」

「よしよく言った」

これで武器も決まった。ま、余興だと思って楽しもう。

(3)「現代編」七月一日 後編(後書き)

甲「おい、作者」

なんだ

甲「いまさら、『うたわれるもの』なんかにはまってるんじゃない」
うるさいな、神ゲーじゃないか？

甲「そうだとすると、こつちも更新しないとダメだろ」
む・・・

甲「やりだしたことは最後までやらないとな」
・・・

(なんで作者の分身ともいえる主人公に俺は説教されてるんだ？)
甲「聞いているのか？」

あ、ああ・・・それより今回の紹介キャラは？

甲「まあ前回は作者の横暴、『金髪碧眼キャラがメイン』の思想に基づいてリスだったんだが・・・」
が？

甲「・・・今回はもめにもめた」
それで？

甲「一応、間宮・・・なんだけど」
けど？

甲「・・・今回は遠慮しとくらしい」
は？

甲「察してくれ」

・・・なるほど、おまえ地雷を踏んだか
甲「うぐ・・・」

おおかた、貧乏・・・ピギヤアアツ!!!

甲「ま、まで。話せばわかる、というか俺はまだ何も・・・イギヤ
アアアツ!!!」

間宮「・・・ふん!まったくこれだから・・・ぶつぶつ」

（作者、主人公再起不能のため今回はここまで。骸と化した兩名は後で間宮さんがおいしく頂きました）
間宮「いただいてないっ！！」

(4) 「現代編」七月二日～三日(前書き)

遅れてすいません。

二日に比べて三日が短めですが、キリがいいのがここなので・・・

(4)「現代編」七月二日～三日

神宮寺の家で行われた歓迎会の次の日の朝。

いつも通りの登校時間。

「ったく、もうちょつと寝かしておいてくれてもいいのに・・・」
こんなボヤキがでるのも仕方ない。

結局昨日は帰るのが午後十二時近かつたし、何より突然のゲームによつて大半の体力を失っていたからな。

寝れたのはほんの数時間だ。

そんなことをのんびりと歩きながら思考していると、いつの間にか学校の玄関に着いていた。

・・・いかな、いくら何でもブーツとしすぎだ。

「む、甲か。おはよう」

「おーっす・・・」

「・・・眠いなあ・・・、おはよう」

そんなことを言いながら、二ノ、祐二、ハルが下駄箱に入ってきた。

「よう・・・。やっぱりお前等も、眠いか」

『当たり前のこと聞くな』

まあ、普段から普通に寝ているはずなのに授業中寝てばかりだしな。
「というか、お前等はもうちょつと起きて授業を受ける努力をしるよ」

俺が呆れ顔でそう言う

「いやだ」「・・・不可能だ」「無理だね」
断言された。

「・・・そうかい」

それに対して俺はもう、ため息をつくほか無かった。

結局バカ二人は午前中の授業をすべて寝て過ごした。

先生たちも少しは何か言えればいいのに、何も言わない。もはや、叱つても効果が無いと見限られたんだろうか？

そうだとしたらこいつらは本当に救い余裕が無い。

「今更何を言ってるのかねこの子は」

俺が一人そんなことをつらつら考えていると高瀬が話しかけてきた。
「・・・そうなんだがね・・・。こう、友達としてどうにかしてやるうか、とだなあ」

「無駄ですわ」

「うん、主に時間と労力が」

そこにリズと間宮が参加してきた。

「相変わらず辛辣だな」

「そうでもありませんわよ。私は事実を述べただけですもの」
そう言うのを辛辣と言うんだ。

「何ですか？」

「・・・いや、別に。それより、何か用か？」

「昼休みだから、みんな甲君の所に集まってきたんだよ」

高瀬がこう答えるとさっきまで死んでいるかのように寝ていたバカ二人はガバツと体を起こすと、

「「やつと、昼飯か（だよ）」」

見事なハモリを見せてくれた。

俺たちがそれを激しく微妙な視線で見ていると間宮とリズが

「祐二は？」

「知りませんわよ。どうしてあの男の行動を把握していないといけないんですの？」

「確かにそうだけど・・・」

「それにあの男なら何処にいても、うるさいのには変わりませんわ。よって、そのうち悲鳴なりなんなり聞こえてきますわよ」

「全く反論できない」

そんなことより、とリス

「早く生徒会室に行きませんこと？早くしないと、またどやされま
すわよ」

「・・・それは激しくイヤだ」

遅れるといつも何をしてくるかわからない会長がいるんだ、遅れな
いほうが身のためだ。

「？　二ノとハルは？」

「私たちおいて、さっさと行っちゃったよ」

相変わらず友達がいのない奴らだ。

そんなことを思いながら、リスと高瀬、間宮と一緒に生徒会室に向
かう甲だった。

「ちーす」

「おじゃましますわ」

「・・・どうも」

「はろはろ」

それぞれの挨拶をしながら生徒会室にはいると

「む？甲君か、遅かったな」

「いえまあ、我が悪友たちの今後のことを話していたらですね・・・」

「

「・・・今更だろう」

どうも見解はリスたちと同じらしい。

その返事に先に来ていたらしい神宮寺も苦笑いしている。

「？　俺たちがどうかした？」

「何でもない」

「？？　まあいいけど、ちょっと・・・」

そう言って手招きする祐二。

「？ 何だよ」

近くに行くと、

「（・・・夏休みの例の件、どうなってる？）」

「（その話か）」

「（当たり前だ。それ以外でどうして、こいつと顔を寄せあうものか）」

「（なんだと、二ノ。もういっぺん！）」

「（まあまあ、今は二人とも争ってる暇はないよ）」

「（・・・分かった。それで？）」

「（ああ、今のところ問題ない。宿泊施設も押さえた。あとは・・・）」

「（あとは会長たちに悟られないことだな）」

俺たちは男四人、顔を寄せあって頷く。端から見ればむさ苦しいだけかも知れないが、今回だけはしょうがない。なぜなら、今度の夏休みに『砂浜ナンパ大作戦』（↑祐二命名）を行うことになっている。

よって、海に行くだけならまだしも、ナンパまでしようとしているのだから見つかったら何をさせられるか分からない。

「ふむ、では全員分の宿泊費などをおごって貰おうか？」

『え？』

間抜けにも俺たちは声をそろえて驚く。

そりゃあそうだろう、何しろ会長の声が真後ろから聞こえてくるんだから・・・。

ん？真後ろ？

異常に気付き、俺たち全員がバツと振り向くともものすごく良い笑顔をした女性陣がいた。

「・・・ちよつと話、聞かせて貰おうか？」
「ですわね」

「ずるいですよ、皆さんだけで行くなんて！私も誘ってくれればいいのに」

いつの間にかちゃっかり馴染んでしまった神宮寺は何かずれたことを言っているが・・・。

「ちよつと、お仕置きが必要かな？」

「あはは、甲・・・懲りないね？」

高瀬や間宮までもが詰め寄ってくる。

『い、いや。待て、話し合えば分かりあえる』

奇しくも重なるようにでた言葉は同じだった。そして、その提案は

『却下』

速攻で否決され、後に残ったのは哀れな死骸が四つだけだった。

完！

「って終わらねえよ?!」

ガバツと身を起こすとそこは保健室だった。

窓から差し込む西日は、穏やかな夕焼けだった。

「・・・あれから三時間くらい？」

「だろうな」

1人呟いたと思っていたそれに返事がある。隣をみると同じようにして、祐二が体を起こしていた。

「ひでえ目にあつたな」

「同感だ」

「二人は無事かね？」

「さあ？」

あのあと、会長たちからものすごい攻撃を受けた。その途中からの記憶がないのだが、これは思い出さない方がいいと言ったことなのだろう。

「当然無事だよ」

「・・・三途の川は見えたが」

すると今度は正面から声が聞こえてくる。そこにはそちらには、体を起こした二ノとハルがいる。

「おう、無事だったか」

「死にかけたけどね」

「・・・うむ」

生きているならよし。だって

「1人でもかけたら、その分一人当たりの経済的負担がものすごく重くなるからな」

全員でため息をつく。

結局、あの計画は会長たちも入れた九人で行くことになった。あげく、彼女たちの経費はすべて俺ら持ちという地獄が待ち受けている。さつきまではあんなに楽しみだったのに・・・。

「・・・なんか行きたくなってきた」

はぁ・・・。

また重いため息が全員から漏れる。

「まあ・・・もうあきらめよう」

「だな・・・」

「前向きに行こう」

「そうだね。日にちも近いし」

「後何日？」

「三日」

「・・・相変わらず夏休みに入る時期が早いけどいいのかね？この学校」

「いいんじゃない？」

「俺たちの気にすることではない」

「その分早く新学期始まるから良いだろ」

詳しいことはまた明日、全員のいるところで話し合おうということになり、その日は全員そのまま帰った。

翌日の昼休み。

今日は早めに集まり、昼食をそうそうにすませ、昨日言っていたとおり夏休みの計画を始めた。

「・・・以上で概要の説明は終わりだ」

今は二ノから日程等の話を聞いているところだ。

「何か質問、または意見はないか？」

男子四人が決めた日程なので女性陣の方にそう投げかける

「はいはい」

すると一番に間宮の手が上がる。

ちなみに俺は書記官っぽいことをしている。ホワイトボードに書くのはハルの役目だ。祐二は・・・雑用？

「花火は？」

「花火？・・・ああ、買いに行くのが面倒だからって俺たちはやめておいたのだ。後始末もあるしな」

「えー、やろつよ」

こちらをみながらそんなことを言ってくる。俺に決定県があるってか？

「良いけど、自分たちで用意してくれよ？」

「うん、まっかせなさい」

「花火か。うむ、悪くはないな」

「ええ、そうですね」

「楽しくなってきたよ」

「あと、二日の辛抱ですわ」

そんな感じで計画の最終的な詰めは行われていった。

「さて、このくらいでいいだろう」

ちょうど鐘が鳴ったとき、会長がそう言う。

「まあだいが変更はあったけど……。まあ問題ないですよ」

元々あった俺たちの案はほとんどが自由時間。当たり前だが……。とにかくその自由時間に予定が入ったと考えれば、何も問題はない。

「そういえば何であんなに自由時間多かったんでしょうか……。？」

『……。(汗)』

や、やはり……。

神宮寺が疑問に思ってしまったている。正直、昨日あんな目にあっているのだから今日は勘弁してほしい。しかも、下手をすると昨日よりも長くなる可能性がある……。最悪死ぬ可能性が……。

ゾクッ

そのとき悪寒が全身を駆け巡った。

と同時にアイコンタクトで男四人は

『(に！げ！ろ！)』

そう交わしあい即座に逃げ出した。

「あ！こら！待ちなさいな！」

「あ！」

「んな！逃げるのはやい！」

「ちょ、ちよつとお！」

「……。悪あがきを」

そんな声が後ろの方から聞こえてきた。

まあ当然後で全員捕まったのは言うまでもないことだが。

(4)「現代編」七月二日、三日(後書き)

甲「・・・遅かったな」

・・・謝罪したジャン

甲「開き直るな」

会長「・・・今回は私だ」

はい、我らが会長一之瀬・・・(がさごそ)・・・葵さんです

甲「おい作者、今完全に忘れてただろ」

・・・キャラが多くてな

会長「多くしたのはお前だろう」

いや、自分の欲望のままに書いてたらこうなった

甲「・・・好きな属性？」

違う

最初のキャラは必要だったんだが・・・。リスなんかは完全に金髪碧眼、ツンデレ要員で後付けなのにメインヒロイン扱いだからあまり強く否定できないけど

会長「・・・」

やめて！そんな目で見ないで！

会長「・・・見たくもないわ！」

・・・地味に来るわ、これ

甲「自業自得だろ」

・・・わかってても、ナイーブな作者の心はブロークンさ

会長「英語で書けないのか？」

書けるけど面倒

会長「ものぐさすぎるだろうに」

・・・ところでさ、キャラ紹介コーナーみたいなことやってるけど・

・

甲「？」

質問とかないとどうしようもなくね？

一同『・・・・・・・・』

甲「今さら言うんじゃないねえ!!」

だ、だって、今ふと思ったんだもん!

甲「だもんじゃねー!!」

会長「・・・・・・・・とりあえず今回から質問を募集ってことでいいのか?」

甲「そうです」

・・・・・・・・しゅく(自重)

会長「今のはいろいろまずいと思うが?」

ですよー

甲「・・・・・・・・流石会長」

・・・・・・・・こんな感じの性格です。

え?何?そんな訳の分らん説明じゃ不十分?そんなあ・・・

会長「・・・・・・・・いい感じに作者が壊れてきたな」

甲「ええ、そろそろ切上げましょうか」

こ、こうなったら奥の手!くらえ!おうg・・・・ぐぶるああああ!!

会長「では!お騒がせしました」

甲「また来週!・・・・・・・・多分」

二人「ばいちゃー!!」

(5)「????編」現代から???へ!

七月六日。

今日は夏休み。

故に前にも言ったとおり、海に来ている。

ここまではまあいい。

案の定というか何というか、やっぱりものすごい嫉妬の視線を感じる。(殺気もたまに)

「なあ、いくら何でもこんなところにパラソルをたてたのは間違いだと思うんだ」

「しょうがないじゃありませんの。適当な場所が空いてなかったんですもの」

「それはそうなんだが・・・」

ちなみに今居る場所はちょうど真ん中あたり。
もっとも視線が多く集まりやすい。

え?そんなことより、夏休みはいるまでの経過をかけ?まあ、そのうち番外編でね。

「・・・ものぐさ作者め」

「? 何か言いました?」

「いや、べつに・・・」

さてそんなことより、今日は絶好の天気だ。泳がなくては損と言うものだ。

「おっしや!準備完了だ」

そんな風に考えていると隣では祐二がビーチバレーボールを掲げてニヤリと笑っていた。

・・・どうでも良いけど、これだけとるとただの変態だな。

「・・・では、行くか」

「そだね」

「行くつて何処へ？」

一人行く場所を聞いていない俺は三人にそう訪ねる。

「ん？あ、言つてなかったっけ？実はね正面から向かつて左手にコートがあるんだ」

「そこへ行くんだよ」

ほう？そっぴや中学以来やつてなかったっけ……。

「……お前も行くか？」

「うん……、そっぴや行くよ」

俺は少し悩んだが、この視線から逃れられるのなら何でも良いと思ひ、賛同したんだが……。

「では、私たちも後で行きますわ」

リズが唐突にそんなことを言ひ出す。

『……なぜ？』

俺たちは見事なハモリで聞き返す。

それはそっぴやだ。わざわざこの視線から逃れるために女子連中から離れるのに、ついでにこれなら全く意味がない。

「い、いや、それは……」

「なにもやましいことがなければ、問題ないだろ？」

間宮がそんなことを言ってくる。

確かにこいつは純粹にバレエがやりたいだけだろうが、それでは困る。

とにかく、俺たちはこの視線から逃れたいのだ。

『こっぴや言つときは……』

ダッ！

ほら、よく言っぴやしょ。

三十六計逃げるに如かず。

「ちょ！何で逃げるのさ！」

「・・・やましいことがあるとみた」

『なんですつてえ！？』

か、会長オオおおおう！！あんだ、何言つてやがる！しかも、ニヤリと笑いながらって！絶対に分かってやってるじゃんか！！

和解がすんだ後、バレエを始めるにはそこからさらに二時間要した。

さて、そんなことがあった昼間とはうって変わってここは宿屋。

昼間照りつけてきていた太陽など無かったかのような涼しさ。花火はまた明日にでもやろうということになり、今日はもう寝ることになった。

だが、その明日はもうこないことにこのときの俺たちは知る由もなかった。

ズドンッ！！

「ゲエ・・・」

くそう、祐二のやろう！寝相悪すぎんだろ！一晩だけで二十五回つて・・・しかも毎回毎回結構ピンポイントなところをねらって来やがるから、蛙のつぶれたような声がでちまったじゃないか。

ズゴッ！

「ぐっはー！」

どうやら今度は、ニノが食らったらしい。

「・・・祐二、おまえは起きていようが寝ていようが迷惑な奴だな」
何気にヒドいことを言いなさる。

ボスッ！

「うぎゃああつー!?」

・・・順番から言つて、何の順番かは知らないけど・・・二ノと来たら残るのはハルなんだけど・・・。それにしてはらしくない悲鳴（？）だった。

二ノの方を合わせると二ノも変な顔をして、目を凝らしている。どうやら二ノの位置からでもハルの様子はうまく見えならしい。そんなことをしていると、突然明かりがついた。

二ノがつけにいったんだろうか？

一番納得がいく考えに落ち着かせておき、改めてハルの方を見ると・・・悲惨な状況だった。

そこにいたのは、自らの急所を押さえてうずくまるハル、そのハルにやられたのだろう祐二がゴミくず同然に転がり、さらにそれを突っついている羽の生えた人。

・・・ん？

・・・んん？

・・・羽？

「っつて！いやいやいや！？」

俺と二ノが愕然とする。

「おまえ誰だよ！っていうか、よく見たらここ何処よ?!」

「あ、ああ！そうだ！ここはどこだ!？」

俺たちは部屋で寝ていたはずだ。

それがどうしてこんな草原と真ん中に？

「ついでに言うとかで僕は着替えてるのか教えてほしいな？」

なんとか復活したハルは努めて平静にそう言い放った。冷汗ダラダラだったけど・・・。

あまりの事態に気付いていなかったが、確かになぜかいつもの制服に切り替わっている。

制服？

バカなこれは家においてきたはず・・・。なんで旅行先に？

「・・・その・・・質問は、皆さんあつまってからお願ひします」
・・・何という折り目正しい女性なんだろうか。

「うちのメンバーとは大違いだぜ」

隣でほか二人も同じことを思ったんだろう、うんうんと頷いている。

「・・・ほう？誰が誰とは大違いなんだね、甲君？」

その時確実に空気が凍った。

それは、さながら凍結地獄。コキョース

触れたものどころか知覚したものすべてを凍らせてしまいそうな感じの世界。

俺たちはガタガタ震えながら後ろを振り向く。

すると、そこにはものすごく良い笑顔をした我らが女子メンバー（間宮、神宮寺は混ざっておらず、近くで呆れている）がいた。

「・・・あはは」

『ひいっ！？』

口は災いの元。

・・・これで何度目だろう。

「それで、ここは何処なんです？」

それは俺が知りたいよ、神宮寺さん。

「確か今日来たところの近くにこんなところはないはずだけど・・・」

「

当たり前だ、こんな春の陽気漂うところなはずないだろう、高瀬。

「広いから何でもできそうだな」

おまえはそれしかないのか、間宮。

「・・・私たちが制服を着ているのも気になりますが、幻想的な光景ですわね」

「・・・いや、この状況にもっと疑問持とうよ、リス。」

「・・・風景もそうだが、そこにいる人と言いくら何でも非現実的やしないか？夢にしては、おかしすぎるしな」

うん、冷静に言われても怖いよ、会長。もうちょつと慌てるよ普通・・・・。

「・・・はあ」

とにかく、この人たちは肝っ玉が座りすぎだ。

「あの、よろしいですか？」

そこで突然今まで黙っていた羽の生えた人がそう話しかけてきた。しかも、かなり平坦な口調で。

「うん、説明は貰いたいけど。まず、君は誰？」

代表でこう質問すると、

「ルマリアと申します。取り合えず、主の元にご案内します」

「はあ・・・？」

珍しく俺たち九人の息がぴったりだった数少ない瞬間である。

(5)「????編」現代から???へ! (後書き)

甲「予定通りの更新だな？」
多分・・・

最近、何か曜日の感覚狂ってさ

甲「まあ、いいけどな」

・・・今日は用事があるからここまでな

甲「は？」

また付け足すって！

んじゃ

小説よ、俺は帰ってきた！

甲「・・・何を言ってるんだ？」

・・・聞き流せ

さて、そんなことより今日は誰だ？

神宮寺？

甲「そうだぜ」

結衣「あの、どうも」

・・・キャラがそろそろかぶってきたね

甲「・・・」

だってさ、ルマリアなんかとき・・・文面だけだともろ被り

結衣「うう・・・、わかってます・・・。本当は私がメインヒロインだったのにサブに変わったときに気付いてます。私はいららない子なんだって・・・」

え？(汗)

結衣「で、でも、こんなにストレートに言われたら・・・う、う

(6)「アースガルド編」神による選定

ついて来て下さい、と言ったルマリアさんについて歩くこと数分。俺たちは草原を抜けて、きれいな石造りの建築物の前に着いた。

「ここが我が主の居城、オドレイです」
オドレイ。

地球上にそんな名前の城は、少なくとも俺が知る中ではないはずだが……。

「ちなみにここは地球上の概念で言うところの『神の領域』です。名前がそうだ、と言うことはできませんが、概念はそれと同じです」
……神の領域？

全く理解のできない俺たちを一瞥したルマリアさんは、

「今はわからずともご説明を聞かれれば、ひとまずの理解はできるかと」

そう言うのと扉を開け、中に入っていく。

その間、疑問に思うことはたくさんあるはずなのに誰一人として質問することができなかった。

ただ、全員の心の中に不思議と不安感はありません、あるのはなぜかルマリアについて行かなければいけないという使命感。それのみだった。

それから全員、終始無言でルマリアさんについて行く。

しばらくすると、ルマリアさんが扉の前で立ち止り、ノックをする。

「お連れしました」

どうやら目的地に到着したらしい。
その部屋にいたのは、

「ようこそ、諸君。……久しぶり、と言つべきなのかな？それともこの場においてならはじめまして、と言つべきかな？」

じんくつじかねつく
神宮寺 兼継その人だった。

「え？なんで、神宮寺のお父さんが？」

それは当然の疑問だろう。

さつきも言ったが、ここは完全に地球というものからずれた場所にあると推測される。

そこに神宮寺兼継がいたのだ。

そこから導かれるものは一つしかない。

そう、神宮寺兼継はこの件に関して何らかの関与、または主犯格であるという事の二つの選択肢しか出てこない。

しかし、前者の可能性は極めて低い。

なぜならルマリアが案内したこの部屋にはこの城の”主”とも呼べる人がいなければいけない。

そして、今この部屋にいるのは、居たのは一人。

神宮寺兼継。

つまりそれは、どういうことか。

「・・・ちよ、ちよっと待ってくれ」

いくらなんでもな発想に行きついてしまったので、いったん頭を切り替える。さすがに色々な事が起こりすぎて頭の回転が悪くなっているようだ。

「甲、落ち着け。今はこの状況を説明してもらうほうが先だ」

お、おう、そうだった。

危うく、本当の目的を見失うところだった。

「そうだな。悪い」

「気にするな」

「それで？説明はもらえるんでしょうな、神宮寺さん？」

俺たちを代表して会長がそう質問する。

「あたりまえだよ。そのためにこの場に呼んだのだしね」

そう言うとき兼継さんは立ち上がり、窓側に歩いて行く。

「まず一つ目、私と結衣の正体から説明しよう。我々はね、神々の統括者をしているのだよ。つまり、最高神。そして結衣は、今は私の使いとして動いてもらってるが後々には、私の地位を受け継ぐことになるんだが、これはまた別の話だな。次に、どうして君らをこんな場所と呼んだかということだが・・・、こればかりはどうと説明できるものはない。もともとあの学校には『力』のあるものが集められていたのだが、そこから厳選するために結衣に現地に行ってもらい調査をしてもらったのだ。そして、選ばれたのが君らということだ。なぜこんなところに来てもらったかは、まあ言葉で聞くよりも現地にいる人から直接聞いたほうが何かと分かりやすい。後で聞くといい」

・・・

・・・

・・・

「え・・・？あの？失礼ですが、言っていることの半分も理解できないんですが」

「・・・というか・・・神？」

「難しいことはよく分かんないぞ」

間宮、あまり胸を張れることじゃないぞ？

「えーと、これは何の冗談ですか？」

「うむ、冗談ではない。私は本気だよ、リーズリット・エルラバーニヤ」

俺たち全員はポカーンとしていた。

まさに、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていたのだろう。

「すまないね。しかし、こちらもう時間がないのだよ。お詫びと言っては何だが、ルマリアと継続して結衣もついて行く。後はこの二人と協力してやってくれ」

「皆さんすいません。けど、父の言うとおり時間がないんです。ですからどうか、今は何も言わずに私たちについて来てください」

そう言つて神宮寺さんが頭を下げてくる。

「いや、そんなことを言われても・・・」

正直今も何がどうなっているのかさっぱり分らない。この状況で私たちについて来て下さい、とか言われても渋るのは仕方ないと思うんだが・・・。

「うゝん、どうする？甲」

隣にいたハルがそう聞いてくる。

「どうするって言ってもな」

どの道、ここでもばんやりしているのも時間の無駄だ。しかし、だからと言つてホイホイついて行くのは・・・。

こんなに、ほいほいついて来ていいのかい？俺はのん

「え？」

「？　どうかしたか？」

「いや・・・」

何か今、幻聴とともに寒気がしたんだが。

気のせいかな。

一応、背後に気を配っておこう。

「しかし、本当にどうしたものか」

「お願いします。今は何も言わずついて来て下さい。詳しい説明は後で必ずします」

俺たち男子四人は顔を見合わせる。男として女の子にここまでされて、背を向けるのはどうかと思うが怪しすぎるのだ。ここまで、怪しいものにいくら男といえどもプライドがどうのとか言ってる場合ではないのだ。

だが、

「ふ、私は行きますわよ！仲間が困っているんですから当然でしょう」

「ふむ、確かにそうだな」

「えーっと、うん私も行くよ。会長さんがいれば敵なしだろうし」

「穂香が行くなら私も行くぜ。楽しそうだしな」

・・・相変わらず女子連中は即断即決。

もうすでに全員が行くことを決めてしまっている。

しかも、こちらには目も向けない。おそらく、こっちが兼継さんに色々と言った時に決まっていたんだろう。

そして、同時に俺たち男子の立場も決まってしまった。

なんでって？

そんなの当たり前じゃないか。こいつらが行くのに俺たちだけお留守番なんてつまらないことこの上ない。

だったら、多少の危険は覚悟の上で楽しい方をとる。

「それで、」

「貴方達は」

「いったい」

「どうするんだ？」

振り向いて、そう聞いてくるリス達に俺たちは苦笑しながら、

『・・・行きますよ』

そう答えたのだった。

「・・・話はまとまったようだね」

その成り行きを静観していた兼継さんは話が終ったとみて、こちらへ話しかけてくる。

「正直理解は全くできませんけどね・・・」

自嘲気味にそう言ってみると、

「まあ、それもそうだろうが・・・。本当にゆっくりしている暇はないんだよ。・・・しかし、このまま行かせるのはさすがに心苦しい。という訳で、せめてもの餞別を贈らせてもらおうよ」

そう言うならこんなわけのわからない状況にしないで欲しい。

兼継さんが合図をすると、今度はルマリアさんが出てきて、

「こちらです」

と言って隣の部屋に案内してくれた。

大人しくついて行くとそこにはなんだかよく分からないウエストポーチが置かれている。

不審に思って兼継さんの方を見るとにつこりと笑って、

「向こうで必要になりそうなものを多少だが入れておいた。役に立たないことはないと思う。使い方は、道中結衣とルマリアに聞いてくれ」

「・・・とりあえず、どこに行くか本気で気になってきましたよ」
着いてからのお楽しみつてことにして置きたまえ、と笑いながら元の部屋に戻っていく。

俺たちは、全員がそれぞれそのポーチを身につけ、兼継さんの後を追う。

「さて、そろそろ君たちには出発してもらおう訳だが・・・」

ここで改まって、少し言いづらそうに兼継さんが切り出す。

この場に及んでまだ何かあるというのか？

正直そんな心情だったが、別に害があつたわけではないので邪険にするわけにもいかない。しごく平静を取り繕って、

「・・・なんですか？」

あ、失敗した。めちやくちゃ不機嫌な声音だ。

「・・・うん、まあそんな風になつちゃうのも仕方ないんだけどね。それは置いておいて、これから行くところなんだが」

「ようやく言うつもりになったんですか？お父様」

「うっ・・・」

「え？」

今の感じから言って神宮寺すら何も聞いてない？

全員で目を点にして振り向くと、呆れたように首を振りながら、

「お察しの通りです。目的は聞かされましたけど、どこに行くかは聞いてないんです」

「・・・大丈夫なのか？」

二ノが不安そうに言う。

こいつはなんだかんだで一番用心深いからなあ。

「ふむ、私の状況から言って問題なさそうだが？その目的とやらは聞いているのだから、そのうえで我々に頭を下げたのだ。どこへ行くかはともかく、まともな理由であることが判断できるが？」

「そうなのか？」

「馬鹿はもうちょっと黙ってろ」

相変わらず頭の回転の悪い祐二を黙らせる。

その祐二も今は文句を言っている場合ではないと思ったのか、ちえつと言いながらも引き下がる。

「はい。理由はまともです」

「う、うむ、私の可愛い娘を遣わすんだぞ？適当な訳があるまい」
どもるから怪しまれるんだと思うが。

「わかりましたから。結局どこに行かされるんです？僕ら」

話がそれていくと感じたのだろうハルが軌道修正を図る。

・・・俺たち四人がツツコム側に回っている時点で異常度がいつもの比でないことはお分かりいただけるだろう。

「うむ、ここをアースガルドとしたら今から行ってもらうところはエルガルドというところだ。まあ、もともと名前に深い意味はない普通に人間界の並行世界のうちのひとつってだけなんだよね」

「え？ということは、俺たちのいた世界とはまた別なんですか？」

「ああ、君らの世界では常識でもその世界では非常識なこともあるだろう。その時のためにルマリアと結衣を連れていくんだよ」

「そういうことです」

そう言つてルマリアさんがこちらを見ながら頷く。

???

何かを言いたげな視線を一瞬感じたけど、気のせいだったのかな？
周りをキョロキョロしているとリズが不審そうに

「何をキョロキョロしてますの、そんな風に首を振って・・・まさ

かいまさら怖気づいたとかでは・・・っ！」

「ちげえよ！なんでそんな風に言われなきゃなんねえのさ。ちよつと考え事してただけだろ！」

「そうなんですの？詰まりませんわね」

なんで、お前の面白いことを俺が提供せねばなんのかという。

さてそろそろ出発しようかなと思い、

「よし、じゃあみんなそろそろ行こうか」

と言うと

「おっと、少し待ちたまえ」

そう言つて兼継さんが引き止めてきた。

「向こうは、君らのいた世界とは何もかもが違う。何より・・・いや、これは実際自分たちで感じた方が早いだろう。とにかく、そんな所に行くにはぴったりのものを進呈しよう」

なんて訳のわからない事を言いながら、何やらがさごそとやったかと思うと、

「何より必要なのは身を守る武器だと思っんだよ」

そして出てきたのは刀、拳銃、両手剣、双剣、片手剣に盾、槍、ハンマー、斧、etc・・・書いていったらキリのないくらいのをどこからともなく取り出してきた。

「ほう、準備がいいな」

相変わらず会長は行動が早い。とつとと拳銃を持っていつてる。

「ちなみにそれに弾切れなんことは起こり得ないようになってる」

何、そのチート。

「では私はこれで」

そしてリズはレイピア。

「私はこれかな」

高瀬は刀。

「私はこれだな」

間宮は両手剣。

「・・・どうでもいいけど、なんで女子が両手剣を軽々持ってるんだろ。」

「ああ、いつぞやの焼きまわしだな」

隣で二ノが、もうどうにでもなれといった感じでつぶやく。

「そだね・・・」

ハルもどうやらツツコム気は失せたらしい。

「・・・どうして、あんなに楽しそうなんだろうか」

あの祐二が茫然としている。まだ、よく事情が頭に回りきらないらしい。

その後俺たちはそれぞれ、順番に二ノ、ハル、祐二、俺という順番に取って行った。ちなみに槍、手斧、短刀（脇差とか）、片手剣と盾という感じだ。

「・・・みんな、それぞれ持ったね」

『おうよ（ええ、うむ）』

「じゃあ、ルマリア。案内してくれ」

「承知しました」

「じゃあ、僕はここで。もし何か用事がある場合はルマリアに言ってくれ。いつでも、連絡を取れるようにしておこう」

こうして兼継さんに別れを告げると、ルマリアさんと一緒にその並行世界とやらに行くための門をくぐるために地下に移動する。

すると、なにやら青白く光る門が出てきて、俺たちはそれに・・・。

「って、待て待て！！なんか吸い込まれてるよ！！」

「大丈夫です。害はありません」

無表情で、そう答えてくれるルマリアさん。もはや逆に怖いです。

「いや、害はないけどね・・・」

なんか色々恐怖心を煽るじゃん！向こう側なんか真っ赤だし、と言おとしたところで、

「では、気を失えば一瞬です」

「え？ちよ、ま・・・」

止めようとした時にはすでに時遅し。

手刀は見事に俺の首にクリティカルヒット。

一瞬で俺の意識を刈り取って行ったとさ。

ああ、神様。僕が何かしましたか？

何処かでさっきの自称神がくしゃみをしているようなイメージを浮かべながら俺の意識は暗い所へ沈んで行った。

(6)「アースガルド編」神による選定(後書き)

甲「お？なにやら更新が早いな」

うん頑張った。

甲「ふーん」

甲「まあ、そんなことより。ここまで読んでくれてありがとうございます」

ございます

甲「とまあ作者とともども、このような稚拙なものを見せてしまい汗顔の至りでございます」

会長「・・・何かの演説かねこれは」

そんなにあきれた風に言われなくても・・・

リズ「そんなことより、なんとかして読者増やさないと今に痛い目を見ますわよ」

そんな言われてもやっと本編に入れるんだよ？それなのにどうしろと

間宮「そろそろ、引き延しっぱなしのあれを書いたら？」

あれ？

甲「忘れたのか？事の顛末書くって言うてたじゃないか。神宮寺の屋敷での出来事のさ」

う

甲「う、って何だよそれ？書く気あるのか？」

あ、ありますもちろん！もちろん、書かせていただきますともしただまあ

会長「まあ？」

もうちよつと後のほうがおもしろいと思うんだけどな

甲「とにかく、きちんと言ったんだからちゃんとやれよ！？」

『ばいばい』

甲「今回は俺が疎外感を味わう羽目に！！」

(7) 「エルガルド編」守護者

場所は変わって、エルガルド・リベルゼ地方コルジュ国、ウェリス城の地下。

「・・・本当に今度こそこれでいいですね、師匠」

「う、うむ。これまでの失敗で自信がなくなってきたおるが、今度こそあっているはずじゃ」

年若い少女とその少女から発せられるプレッシャーに怯える老人。彼らが立っているのは、超巨大な魔法陣。実は彼らは、今この国に起きているとある事件を納めるために神霊召還を行っているのだ。神霊とはその名の通り、神に匹敵するものである。それを召還しようと思うぐらいなのだから、事件の大きさも伺える。

ただ、先ほどの会話を聞いての通り、今まで一度も成功していない。たまに成功しても、なんだかよくわからないものだったり、調理器具だったり様々である。

余談だが、これらの物は兼継が適当に召還に答えて、ポイポイ送り込んでいる物だったりする。それについて兼継は「・・・人材不足なんだよ」と実に深刻そうに語ってくれました。

閑話休題。

とにかく彼らは、この騒動を止めるためにこんな事をしているわけだが、そうそううまくはいかないわけで通算二十四回も失敗しているわけである。

そして記念すべき二十五回目は

バシユウウウッ！

「きゃあ！」

「むう！？」

何かが弾けた音、今度こそ成功かと思い二人が魔方陣の中心に目を

向けると・・・

何もなかった。

それはもう完膚なきまでに。

「ししょー。こいつはどういうことですか？」

「・・・まあ、天才と言われるわしにも失敗はあるんじゃない」

「師匠、もういつそ隠居しては？」

「な！ま、まだ、わしは現役で行けるわい！」

そんなやりとりをしているとなんと、再度魔方陣が光りだした。

「む？」

「え？」

ギアア、ギアアやっていた二人の視線がそちらに向く。
そこには、

「いつつつ。・・・今度はなんだよ。もう、並大抵のことじゃおどろかねえからな」

「・・・フン、ドラゴンでも出てきたら驚くんですの?」

「まあ、言わんとすることはわかるよ」

「・・・痛いな」

「おや、ここはどこなんでしょう?」

「ルマリアさん?その言葉にはものすごい不安を感じるのですが?」

「・・・先程、兼継氏が言っていた世界の何処かだろう」

「会長さん、アバウトすぎる」

「地名がわからないから、仕方ないです」

「・・・結局なんなんだ」

いつもはバカバカ言われている祐二を始めとし、いつものメンバーはあまりの出来事に茫然としていた。

まあ、つまり門をくぐったらそこは異世界、なんていう常識にも程があるものを見せられたのだ。言動がちぐはぐになってしまったとしてもおかしい事ではない。

「・・・師匠」

「うむ・・・」

「苦節二年(?)ようやく、この戦いを終わらせることができそうですね」

「(・・・本当に召喚できてしまうとは・・・。ワシもこんな風に出てくるとは思わなんだわい)」

「? 何か言いましたか、師匠?」

「いや、何も言っておれはせんよ」

「そうですか?」

この時ばかりは、馬鹿正直な自分の弟子に感謝した。

「そんなことよりも、あの者たちが何者が確認しておいた方がよろしいのでは?」

師弟関係から、主従関係に切り替えた師匠と呼ばれていた人がそう言う

「・・・そ、そうですね。これがもし、間違いだったら目も当てられません」

先程までの弟子と師匠の関係とは打って変わって凜とした雰囲気を漂わせて、

「・・・ごきげんよう。貴方がたをお呼びしたのは我々です。できることなら協力していただきたいことがあるのですが」
そんなことを言い出した。

そんなことを言われても俺達はこの世界がどこかとか、なんでいきなり地下にいるのかとか聞きたいことが山ほどありすぎるのと、彼女の容姿と雰囲気魅せられて男子四人はポーツとしてしまっていたので、代表として会長が一步前に進み出て、

「何者と言っ前に人に名を尋ねる時は自分から名乗るのが先ではないのか？」

「これは失礼しました。コルジュ国第三王女ベルセリア・ゲエテ・コルゼーノと申します。それで貴方達は？」

「・・・お、王女ですか。俺たちは・・・（なんて言えばいいんだよ）」

小声でルマリアさんに尋ねてみる。

「御神の使いです。彼らは私の付き添いでございます」
付き添いて・・・。

なんだか違う気もしないでもないが、これ以上面倒なことになるのはごめんなので黙っておくことにする。

「そうでしたか」

「うぬう・・・王女、早速ですが彼らに頼んだ方がよろしいのでは？」

「そうですね・・・。その前に貴方は名乗らなければいけないですよ」

「そうでしたな。コルジュ国Sランク魔術師ゲオルグ・シュバーン。この国の宰相も務めておりますじゃ」

「そして私の魔術師の師匠でもあります・・・それで貴方達が本

当に私たちの待つていた人たちなのか確認のために・・・」

そう言いながら自身を王女と名乗っていた子とその自称だという人が構えた。その次の瞬間、

ズズズズッ！！

と言いながら地面から何かがい出してきた。

「この者たちを倒していただきます！！」

訳のわからない俺たちに、ルマリアさんが

「これらは、ここに来る者たちを見定めるために置かれたこの国の守護者たち。彼らを倒さねば、目的を達成することは不可能です」俺たちはその言葉に絶句する。

あんな人でないものと戦えって？無理を言わないで欲しい。

だけでもあ、この御三方は違ったようで・・・

「ほう、面白い。この程度でこの私を？見くびっては困るな」

そんなこと言わないで！増やされたらどうするんスか、会長！

「・・・人でもないものにこの私が負ける、とこう言いたいのですか？フッフ、いい度胸ですわ！その思い込み、丸々全部改めさせてあげましょう」

まあ、そうだろうなあ・・・。もともとプライドだけは高いから。

いや、戦闘能力もか。

「おら、なんかわくわくしてきたぞ」

そしてお前はどこのサイヤ人だ、閻魔。

「ふむ、私には関係ないのですが。まあ、良いでしょう」

「皆さん、私には治癒魔術が使えますのでご安心を」

「・・・みんな、テンション高いなあ」

・・・ほかの女子の方も戦闘準備は完了しているらしい。

そして、俺達男子のテンションはガタ落ち。

『・・・なんか、真っ先に死にそうだな俺ら』

よかった、みんな心は一つだ。

というかさっきまで普通の高校生だった俺らがそう簡単に勝てるもんだろうか？

「その点に関してはご安心を。我が主人が何らかの策をしているかと・・・（多分）」

「なんか、不安をあおる発言だね」

あのズボラ神様に確定事項などありはしないのです、と達観し多様に言うルマリアさん。いろいろあつたらしい。

すると、そこで突然頭の中に直接声が聞こえてきた。

『ふっふっふ、安心したまえ。それでも、ちゃんと肉体強化をしておいた！』

まじで！？

『おおっ、マジだとも。試しに動いてみるといい』

みんなも始めは目を丸くしていたが、だんだん慣れてきているのだろっ。軽く動いて、驚いている。

だが、

『・・・あ』

おい、なんだその『あ』は！

『い、いやあ。・・・ごめん、君にだけかかっていないらしい。・・・

・どういうことだ？』

なにいい！！

「？ どうしたなせ動かん」

「・・・いや、会長。非常に申しにくいんですけど」

「けど？」

「俺の身体能力変わってないらしいです」

『・・・は？』

全員の目が点になる。それはそうだろう。

「ば、ばか！それじゃ、ただのお荷物じゃん！」

「その通りだけど！面と向かって言われると結構傷つくぞ！それ！」

そう言ったものの全員から白い目で見られるのは変わりない。

『す、すまない。なぜこのようになっているのか・・・私にもまいちわからない』

やけに真面目な兼継さんの声が響く。

つまり、どういうことで？

『いずれにせよ、もうどうしようもない。かけたのは確かだから、いつかひよこつと出ると思う』

そんな、モグラとかじゃないんだから・・・。

「！！」とにかく、今は文句を言っている暇ではありませんよ。目の前の敵に集中してください！」

ブツブツ言っている俺たちに向って、そう言ったルマリアさんは敵を引きつけるようにして離れていく。

その時、ハンマー状の物を振りまわして接近してきた人型にハルが手斧で応戦する。

ガキイイイン！！

ズバンツ！

ものすごい衝突音がした後、二ノが背後にまわり槍で袈裟掛けに切っていた。

・・・ものすごい切れ味だ。

『間違っても、持ち主やそれに味方するものは切れはしなようになっている』

・・・切れはしなくても、衝撃は来ますってか？

『・・・』

来るのかよ！！

そんなことを言っている間にも、襲いかかってくる奴ら。

今度は三体同時だ。残っている人間は、祐二と会長、それにリズ、高瀬、神宮寺、間宮だが、俺と神宮寺は戦闘員ではないため除くとして戦えるのは五人。二ノとハルの二人は絶妙なコンビネーションでばたばた倒していく。こっちには当分戻ってこれまい。

そんな風に考えていると祐二を前面に会長が援護射撃を行ないがら双剣を持った敵を遠ざけていく。

「とにかく！戦えないのなら何とか生き残れ、ここを抜け出すのはそれしかないと思え！」

そして、リズ達三人は二体（それぞれ斧を持っている）を相手にス
ピードと技で翻弄していた。

「一撃をもらったら、強化の届いてない人間なんて紙と同様ですわ
！できる限り逃げなさい！」

リズがそう声をかけてくるが、ここは地下室。逃げられるスペース
などともと決まっている。それに出口から外へ抜けようとするな
ら、奴らのど真ん中を突っ切らなくてはいけない。

（どうする？どうしたら切り抜けられる！）

目をつぶって考える。

これは癖だ。自己に集中して、物事を考えようとするとときや案を練
る時のだが、ここは戦場。一瞬の隙が命取りである。そしてこうい
う場において、弱者から消そうと動く影のようなものもやっぱり居
る。考えから戻り、目を開けた目の前には・・・どうやっても殺傷
圏内から逃れられない距離にいる太刀を持った騎士のような人間（
？）だった。

死んだ。

鮎川甲がこれを受けるか、かわすかしたとしても、後ろにいる神宮
寺が死んでしまう。ゆえに回避はできない。

よって、死亡。

相手はすでに詰んでいる。

ならばどうする。ここで何もせずに死ぬのか。

いや、違う。

これでは死ねない。

こんなところで死ねない。

意味もわからない場所で意味もわからない場所で殺されるなんてま
っぴらごめんだ。

だから抗え。

例え、敵わないと知っていても死ぬことをあきらめる必要などない！
チェックメイトではないのなら、ただのチェックならまだ逆転の術

は残されている。

一瞬の思考ののち俺は反射的に盾を構えていた。なぜかは不明だ。そんなことを考えている余裕は今はない。

ガイイン！

手にもものすごい衝撃が伝わってくる。ある程度は逃がしているからいいが、もろに受けていたらと思うとぞっとする。

だが敵もそう簡単に諦めるような輩ではない。

そのままの姿勢から先程の下段からの切りかかり方とは変わって、上段。袈裟掛けに切ってくる。それも盾で防ぐと、今度は衝撃に耐えきれず、後ろに吹き飛んでしまった。

ガイイン！ドゴオン！ドサッ。

そして、なんの支えも無くなった俺は俯けに倒れこんでしまった。視界が赤い。

いや、視界どころではない。

全身からところどころ、何かが流れていくのを感じることができる。それもおそらくは、赤だろう。

「く・・・ふ・・・く、そ・・・なんだよこれ」

地面に仰向けに転がり直しつつ、いまさらなことを考える。負け確定。

いや、そもそも勝負にすらなっていないものにどうやって勝つのか。だが、ここで諦めるわけにはいかない。

だけど、勝つ方法がない。

仲間の腕を頼ることは不可能。

ならば、己の手で道を切り開くしかない。

【ならば、力を欲するか】

そんな声が聞こえてきた。
しかし、意味がわからない。そんなことはさっきから言っていることだ。

【欲するか。否か。答えよ、今代の使い手よ】

「あゝあゝ！欲しいよ！ねだってくれるんなら是非ともな！」
そんな感じに自棄っぽく言ってる。

どの道、今からでは間に合わない。もうほとんど目の前に刃が迫っているのだ。

【・・・了承した。では今代の使い手に幸多からんことを。これより我が主のために我が身あり。故なればこそ・・・】

次に起きた現象に俺は固まってしまった。

「・・・は？」

閃光と共に現れた人物は、

白銀のマントを翻し、

華奢な体躯には似合わない鎧を身にまとい、

腰につりさげた剣で、

太刀を弾き、

その切り返しで分厚い鎧ごと敵を切り裂いた。

この間わずか五秒。

登場してからわずか数秒で、瞬きの間に倒してしまっていた。そんな非現実的な光景に茫然としてしまう。

確かに、この状況にいる時点で十分非現実的だが、それ以上に非現実的だった。

否。

今更だが、あり得ない。

そして、その人はまるで俺を知っていた顔で

「主よ、久しぶりですね。それで？いつまで寝転がっているつもりなのです」

そんなことを言いだすのだ。

「お？あ、ああ……。ところであなたは誰なんだ？」

「？？何を言っていられるのです？主殿……。は、……。まさか記憶が？確かに、今は同一人物であって……。仕方ありませんか」
「????」

納得するのはいいが、一人で自己完結してもらってはこちらとしては、全く意味がわからなくてとても困るのだが……。

「うーん、じゃあ答えましょう。私は創世の女神、メルクス・アナケディア。メルと呼んでね」

「……。いや、まあ」

そんな事よりも、今は訳の分らん人型が襲って来ているんだった。その間にも、メル（？）はぶつぶつと言語機能がどうか言っていた。

「安心してくださいな。私が来た以上、これ以上戦う必要もないでしょう」

「いや、なんで？」

「まあまあ、取りあえず見ていて下さいな」

そんな軽い口調で言われても……。

メルは人型があふれ返る中を歩いていこうとする。

「ちょ！メル！？そんな所通ったら！」

俺の制止も聞かず、そのまま歩いていく。

その時、一番近くにいた人型がハルバートを持ってメルに切りかかった。瞬間やられると思った俺は目をつむっていた。

だが、

倒れているのは人型の方だった。

「あり得ないだろ・・・」

ぼそつと言うと、聞こえたのかこちらに振り返って、手を振ってきた。思わず振り返ってしまったが・・・。

どうやら、さっきから訳のわからない異常事態が続発しているため、思考がうまく回り切っていないらしい。

茫然としていると、横合いから飛び出してきた人型が切りかかってくる。

「うおっ！？」

すんでのところでバックステップでかわす。

「お？おお！？」

かわしたと思っていたら、なぜか今度は十メートルも距離が開いている。

「・・・え？」

まさかとは思うが、一足でここまで下がった？

「うそだろ？と言うかまさかこれが、さっき言っていた力って奴か？」

やはり、非現実的すぎる。

だけど、現実というのはそんな事を悠長に考えている暇もなく、その人型が追ってきた。

「シネイ・・・！！」

「なっ！？」

しゃべった！？

思考がある奴なんて初めて見たぞ！

・・・いや、今さっき見始めたばかりかだけでも。

「ナニヲオドロク。ワレラハコノ国ヲ守リシ、守護者ナリ。生前ノ

強サニ比例シテ意思ガ残ルノハ当然ノコト」

何やらご丁寧に解説してくれたようだが、残念。今の俺はお話を聞く気分じゃないんだ。

「こいつ！」

ブンッ！

適当に振り回せば、掠るぐらいするかと思いきや、

「ヌルイワッ！」

逆にはじかれた。

それも、真っ向からの打ち合いで。

「ワカラヌカ？ ココニ居ル者スベテ、貴様ヲヨリモ実力ガ上デアルコトニ」

また何か言っている。

だが今度は、聞く余裕がない。

周りの仲間たちはその全員が傷ついて、疲れ切っていた。無傷なのは俺ぐらい。

かといって、この戦況では逃げることにすら難しい。

いやその前に、生き残れるか？

待て待て、でもさっき現れたメルは「自分に任せる」的なことを言っていた。

それに賭けるか？

正直リスクが高すぎる。

「迷ッテイル間ニモ、仲間ハ傷ツキ倒レテイクゾ」

頭をフル回転させて考える。

「くそ！ こうなったら！」

もうやけだ！ と言いながら突っ込もうとした時だった。

「はいはい、自棄になつてはダメですよ？ 主殿」

メルに呑気にたしなめられてしまった。

「そんな睨まないでよ」。話はついたから、もう戦わなくていいよ？ つていいに來たのに」

「へ？」

(7)「エルガルド編」守護者(後書き)

甲「いつになく、文章がめっちゃくちゃじゃないか」

すまん、とぎれとぎれで書いたから自分でもよくわからなくなってきた

甲「そんな事だろうと思ったよ」

リズ「それより、私の過去編はどうなってますの」

鋭意制作中・・・って！貴様どこからわいてきた！

リズ「人のことをウジ虫のように言わないでくださる?!」

おう、すまん

リズ「まったく・・・」

甲「そういや、本編で俺がごたごたやってるときにリズ達は何してたんだ？」

リズ「へ！？そ、それは・・・」

言ってやるな、作者的にもヒロイン的にも破滅だからそれ言ったら

甲「？」

リズ「・・・作者に変な借りができてしまいましたわ」

変なとか言っな！

甲「まあ、そんなことよりも。今週は自己紹介コーナーはお休みです」

甲「なんで、俺がこんなこと言うの？作者の仕事だろ？」

スタッフ「作者はおいしく頂きました」

ひい！？おいしく頂かれちゃうの?!

リズ「いい感じに、壊れてきたのでここまで」

甲「次回は日曜日更新だと思えます・・・多分」

(8)「エルガルド編」無意味な戦闘

最初、こいつは何を言っているんだろうか？という感じだったので思わず、睨む形になってしまったようだ。

「それは、どういうこと？説明ぷりーず」

「了解しました」。簡単に言っと、味方だと信じてもらったんです」
「本当に簡単だな」

呆れながらメルにそう言っと、王女様が前に進み出てきて

「無礼をどうかお許してください。貴方達の力は、存分に分かりました。」影”はすぐに収めますから、ご安心を」

そう言つて、手を軽くふるうと守護者と名乗り、”影”と呼ばれたものたちが消えていった。

しかし、

「・・・マダ消エルコトナドデキン。ソコノ男ノ実力ヲ見ナケレバ安心シテ眠ルコトナドデキヌ」

「いやいや、そこは眠ろうよ。あんたたちの主人がああ言っているのに——」

「男ナラ黙ツテ剣ヲ拔ケ」

戦い続けるなんて愚かだよ、と言おうとしたのにそれを遮られてしまった。

ここでいやだ、と言つてもいいんだろうがここまで言う奴は何を言つても話がループするだけなので、言つても無駄なのだ。そして、無視を決め込めば延々と殺気を向けられるだけというどの道地獄だ。まあ、美少女とかなら許せるかもしれないけど・・・。あ、俺見つめられてる！みたいな・・・。

・・・ごめん、わかつてるよ。自分が痛いことくらい。

うん、気を取り直して・・・。こういう奴らの対処法はと言つと、俺はいつもこうすることになっている。

「いいぜ。ただし、勝敗がついた時点ですととおかえり願うからな」

「ヨカロウ」

「うし……。じゃあ、いくぞ」

片手に盾、もう片方に剣を構える。

向こうは、騎士剣。名前はわからないが、ツヴァイハンダーとかだろっか？

そんなどうでもいい事は置いておいて、見た感じ……。

突いて倒れるような輩ではなく、かといって剣戟が通用するかどうかと言ったら甚だ不明だ。

それに先程、攻撃を受けた時に思ったが……。この盾はおそらく後2、3回しか防いでくれないだろう。

……。やけにもろいなあ、俺の武器。

戦力分析してみて改めて思ったが、圧倒的に不利すぎる。ここまで来るともはや笑うしかない。

ちなみに、さっきまで戦っていた仲間たちは全員こちらを固唾をのんで見守っている。

（メル。お前まで観戦してどうする。こっちはいろいろ疑問に思っているのを後回しにして、戦っているんだが？ちよつとくらい力か、知恵を貸してくれないかね？と言うか、俺の力が欲しいよ！で出てきたのになんで？）

「そりゃ、その人が主殿の実力を見たいって言うてるから……。力は貸しちゃだめだと思ったんですよ。気遣いのできるイイ子でしょ？」

なんて言いながら胸を張っているが、正直俺からしたらいらん気遣い以外の何でもない。

（いいから手を貸せよ！このままじゃ、死ねるって！）

「頑張れ」

いい加減な女神だなっ、おい！

そんな俺の心の叫びなんか丁寧に聞き入れてくれるほど現実はい

はなく、

「来ナイナラコチラカライクゾ！」

ビュオン！

ものすごい剣風とともに刃が迫る。

ある程度の武術の心得のある奴らなら、これが一撃必殺で狙いにきていることくらいわかる。しかし、いかんせん俺の場合爺さんからちょこつと習って、終わってしまったているのでどこを狙ってくるのか、どう防げばいいとかは全く分からないのだ。

なので、馬鹿正直に盾で正面から防ぎに行ってしまう。

そうなる と必然的に、力で負けている俺はその一撃の重みに耐えられるわけがなく、吹き飛ばされる。

しかも、あと三回くらいなら受けられると思っていた盾は今の一撃で罅や、亀裂が至るところに入っており、とてもじゃないがもう一撃すら無理な状態だった。

「・・・ヤハリ、貴様二八荷が重力ロウ。ソレカラ解放シテヤロウトイウノダ。感謝コソスレ抵抗スル必要ハナイト思ウガナ」

そんな事を言いながら、止めを刺さんと追撃してくる。

「自分のやりたいことくらい自分で決められる。お前なんか選んで貰わなくて、結構だよ！」

それを俺は返す言葉と共に脆くなった盾を振りかざし、転げまわりながら追撃から逃れる。

だが、その拍子に瓦礫にぶつけたのか盾が完全に砕けてしまった。

「・・・マジかよ」

盾とするための物を失い茫然とする俺。

それを好機と見て、突っ込んできたスピードそのままに切り返してきた。

ズバンッ！

なんとか避けきったものの俺の後ろにあった壁がご臨終だ。というよりも、剣としてはあり得ないくらい切れ味だ。石造りの壁を一刀で切り裂いてしまうのだ。

そんなものを盾もなしにどうやって戦えというんだ。

ギリツ、と歯を噛みしめる。

ザシュツ、と地面から足が離れる。

ブウン、と剣を振りかざす音がする。

ここからはただの奇跡。

偶然なのか、はたまた必然なのか。それはわからない。けれど、結果は必然。

鮎川 甲は、死ぬ事なんてできなかった。

仲間がいるのに、約束を果たさなければいけないのに死ぬことなどできなかった。

(リズside)

終わったと思った。

あれは完全に相手の必殺の間合いだ。

何が起こったのかはわからなかったが、助かったことには変わらない。

ほっ、と安心するが・・・。

なぜか、ぞっとした。

敵に？いや、違う。もっと別の何か、自分の命が危なくなったときに感じる、そんな感覚。

一人。

リズは戦慄する。

(ルマリア side)

なぜ？

ルマリアが最初に思ったのはそんな事だった。

それもそのはずだ。彼、甲から感じ取った波長には確かに、ルマリアにとって忌々しいとしか言えない気配を感じ取ったのだ。そしてそれは、同時に甲の勝利を確定づけるであろう気配。この世に存在してはならないはずの魂。

何年も前に数千年の眠りついたはずの神ですら超える、神。神を作った神。

伝説にしか聞いたことのないようなおとぎ話の世界の人物であり、ルマリアの半身とも言える存在。

しかし、今のルマリアが半身であるようにその半身である者にも完全体並みの魔力はこもっていないはずなのだ。

だが、甲に宿る魔力は完全体の魔力すら凌駕している。一人。

ルマリアは思考する。

(・・・out)

そう考えた瞬間、刹那の差でこちらの刃が防御に回るのが早く、ギリギリのところで間に合った。

そう間に合ったのだ。

(あぶねえ・・・。今一瞬、何かが見えた気がしたんだが・・・) 甲は意識が飛んだ一瞬に自分の裡にあるものを垣間見ていた。しかし、本当に刹那だったためそれが何かは分からなかった。

それでもいい、と。

それを知っていたら、多分俺は戻ってこれなかったから、と。
甲はそう思う。

「・・・っんの！いい加減にしろ！！」

そんな風に考えている間にもギリギリツと力で抑え込もうとして来る騎士風の影に怒鳴りつけながら、渾身の力で押し返す。

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「ドウシタ？モウ息が上ガツテイルゾ」

うるさい、と言ってやりたいが・・・。そんな体力すら惜しい。

さつきもそうだが、壁にぶつかったせいで今すぐ吐血して倒れたいぐらいの痛みが全身をくまなく襲っているのだ。

こんな状態でいつまでも戦えるはずがない。

「ちっ！」

突っ立っていてもしょうがないので、切りかかる。

「フン、ソナナ剣デ何ガスタイノダ」

敵が何かを言っているが、無視して斬りかかる。

「何度モ言ウガ、ソナナ剣デハ・・・」

息をつかせるな、一瞬でいい。

一瞬でいいから奴を上回れ。

その一瞬で打ち取ることが可能だ。

問題はそこまで体力がもつのか、ということだ。

袈裟掛け、逆袈裟。

あらゆる角度から、避ける隙を与えぬように踏み込み斬りかかり続ける。

「ム・・・グッ！」

数十合と言う打ち合いの果てに、影がふらついた。

こちらの攻撃に怯んだというよりも何かに引つかかったという感じだ。

だが、あいにくこちらそんな分かりやすい隙を見逃すほど素人ではない。

「・・・っ！死ね！」

ビュンッ！

疲労で徐々に重たくなってきていた腕を無理やり振り上げ、できた隙に渾身の一撃をたたきこんでやった。

ズバンッ！

先程、向こうが壁を斬った時のような音がして、影が揺らぐ。

「・・・ヨカロウ、ソノ実力確力ニ認メル。ダガ、覚悟セヨ・・・

モシモ・・・コノ先・・・テモ・・・引ク・・・又」

「うるさい。死んだ奴はとっとと墓場に帰れ」

思ったより体力を使ってしまったて、答えるのも煩わしい。

ドサッ

という何かが倒れる音がした。

そんな事を考えていると、妙に視界が地面に近いことに気づく。

（あれ？）

事の成り行きを見守っていたみんなが駆け寄ってくる。

「・・・！・・・？」

「・・・！？・・・」

「・・・！！・・・？！」

口々に何か言っているが、意識が遠のいていく俺にはよく聞き取れなかった。

「・・・ここにいたのですね」

「やっぱり主は、主でした」

最後に、ルマリアとメルがそう言ったのを何とか聞き取って俺の意識は完全に闇にのまれた。

(8)「エルガルド編」無意味な戦闘(後書き)

・・・あれ？

甲「あれ？じゃないだろ・・・」

うん、ごめんいろいろ没った

甲「なんだか、ストーリーがだんだんねじ曲がってきてないか？」
うんうん

甲「はあ・・・」

ルマリア「それより」

うわっ！

ルマリア「なぜ、そこまで驚くのです」

いや、そんな心外です・・・みたいな顔をされても・・・ビビるだ
ろ・・・

甲「気配消してたからね・・・」

ルマリア「消してませんが・・・」

え？

ルマリア「存在感が薄いと言いたいのですか？」

メル「・・・単純にこの二人がバカなんだよ」

メル・・・

それはあつてるかもしれない

甲「実を言うと作者はこの更新の間にメルの本名を忘れている」
言うなよ・・・

ドゴッ

ぐはあっ！！

甲「・・・全治一週間か？」

どう少なく見積もっても一カ月だろ！！

メル「どうやら、まだ威力が足りなかったみたいね」

・・・十分痛かったんだけど・・・

ルマリア「では、私からも」

いや、そんな便乗の仕方じゃないし・・・

甲「ま、がんばれ」

こら、その主人公！ちょっとは止めようと考える！！

甲「なんで？」

・・・え

甲「たまには自分で食らうのもよかるう？」

・・・

・・・

・・・

・・・（汗）

い、いやああああああ！！！！

二人「大丈夫・・・すぐすむから」

ぎ、ぎにやああああああああ！！！！

(9)「エルガルド編」王宮

(other side)

次の日の朝。

ハル達男三人は甲が倒れた後に説明を聞かされ、協力を要請されていた。協力自体は頼まれなくても、こちらもその問題を解決しないと帰れないのでやるつもりだったが、そこで一つ問題があった。それは、

「・・・まさか、甲にだけ何もかかっていないとは・・・」

こう言つてはなんだが、もともと甲の身体能力は高い。しかし、その説明の時に聞いていた限りだとこの世界においては平均と大して変わらないのだ。

「・・・まあ、あいつのことだから何とかするんじゃないかね？」

「・・・確かに」

「言われてみればそうなんだが・・・」

口々に祐二と二ノ、ハルは言う。

「まあ、取りあえずあいつは自分でどうにかするだろうって事でいいよな」

「ああ、今はそんなことよりこれからどうするかってことだよ」

ひどい言われようだが、実際そうも言つてられないので誰も何も言わない。誰が何も言わずとも甲のフォローをするつもりだからだ。

「・・・これから、どうする？」

「しばらくはここを動くことはできんだろう」

「そだね。何より情報が少ないし」

女子たちとも話し合わなければいけないだろうが、本筋はこちらで決めておいても文句は言われまい。そう考えての案だったが・・・。

「まあ、妥協案としてはそこでしょうね」

「ふん、甲君なしでも少しはできるじゃないか、馬鹿トリオ」

果たして、却下されることはなかった。

「って、いつの間に・・・」

「始めからですわ」

こういう時リズは堂々と自分から言う。敢えてぼかしたりなんかはしない。

「それじゃ、しばらくはこの王女にお世話になるってことか？」

「そうだよ。って、間宮は聞いてなかったのか？」

「・・・ごめんね。長文覚えるの苦手な冬子で」

なぜか高瀬が謝る。

「まあ、いいか。それじゃそういうことで、あとはアイツが目覚めますのを待つだけなんだが・・・」

「・・・じゃあ目を覚まして、誰もいないってのはなんのいじめだ？待ってた割には、ずいぶんな扱いだな・・・」

(other side out・・・)

目が覚めた。

(う・・・。ここは・・・?)

傷が痛むので、顔をしかめながら周りを見渡すとメルがニコニコしながら、こちらを見ていた。

「・・・なんだ、その顔は・・・」

「いやあ、ご主人案外目覚めるの早かったね
言うことはそれだけだよ・・・」

「と、そんなことよりみんなはどうしたんだよ」

先程周りを見渡してみたが誰もいなかったので尋ねてみる。

「さあ？ついていこうかとも思ったけど、ご主人からそんなに離れ

らないのよね」

せいぜい、十メートルかしらと首をかしげながら言ってくる。

「そもそも、なんで俺にしか見えないんだ？」

「力が弱まってるから」

「何の？」

「この世界の」

「は？」

えらく大きい話になった。

「もともと、この世界を救うために来たんでしょう？それなら、ここが危機に陥っていることくらいわかるでしょ？」

「それくらいは分かるが・・・具体的にどんなふうにまずいんだ？」

「そうね・・・。まずは、ベーシックに魔王がいるのよ」

「ホントにベーシックだな・・・」

「まあ、一人じゃなく何人もいるんだけど」

「・・・・・・」

どこのRPGだよ・・・。

「次に世界のバランスよ。これを戻すには、かなりの労力があるわ。それこそ全世界を回らないと駄目ね」

「・・・は？」

「この世界は・・・。一つではないの」

「ああ、それなら知ってる。俺たちの世界の並行世界。同じ時間軸にありながら、位相がずれているため本来なら認識できない世界、なんだろう？」

要は、ラジオと同じだ。発信源は一緒でも、周波数が合わないと聞こえない。そう言うのと似たような感じだろう。

「それも正解。だけどね、世界はさらに分岐している。ご主人の世界に概念だけある生命の樹セフィロト。それが、この世界には実際に存在している。普段は調停者がいて、それぞれの世界のバランスを保っているんだけど、それぞれの世界の魔王、もしくは魔の軍勢がその人たちを幽閉してしまっているの。だから、その人たちを助けなきゃ、

帰れないわよ？ご主人」

その人たちが最後の力を使ってやっとこの下位世界に貴方達呼んだんだからそれがないと出れないのよね、とのたまう。

「・・・なんじゃそりゃ」

どうやら俺は・・・、俺たちはとんでもないことに巻き込まれているらしかった。

どうにかなるんだろうか？

「どうにかするんです」

・・・心の声を読まないでくれ。

「りよゝかい」

絶対わかってない、コイツ。

「そんなことより、あいつらと合流するか・・・。どこに行ったかくらいわからないのか？」

「？ わかるけど、えゝつと・・・」

そして、メルが言っていた場所に移動すると全員が固まって何かを話し合っていた。

なんとなく疎外感を味わった俺は、いじわるっぽく

「・・・じゃあ目を覚まして、誰もいないってのはなんのいじめだ？待ってた割には、ずいぶん扱いだな・・・」

と言ってやった。

すると、俺からの返答は完全に予想外だったのだろう全員が固まっている。

そこまで、驚くか？普通。

「もう起きても大丈夫なのか？」

比較的軽度の驚きですんだのか二ノがはじめに復活する。もっとも、こいつは驚いてるんだか驚いてないんだかわからないが・・・。

「全然OK！・・・っとはいかないな。若干まだ痛むな。けど、動

けないレベルじゃないな」

「とても、そうは見えなかったがな」

今度は会長。しかし、この人も本当に驚いたのか？ノリで周りに合わせている気がしてしょうがないんだが・・・。

「・・・寝たら治るもんだろう？」

間宮、だからお前はどこの星出身だ。

「冬子、意味分らないよ。でも、早く目が覚めてよかったね」

「ま、そんなに長く寝ているようでしたらたたき起していますわ」

「病人に対する行動じゃないな」

「それはいくらなんでも・・・。ですが、お目覚めになられて良かったです」

・・・なんだか、暗に死んでもおかしくなかったことを言われている気がする。

「・・・あはは。ホントだよ」

・・・アノ、ソノワライガトテモコワイノデスガ？神宮寺サ
ン。

そんな風にいつものようにじゃれていると

パンパンッ

「皆さん、こんなところに居たんですね。父と母が話があるので呼んで来いとのことですよ」

突然、お姫様が乱入してきた。

「・・・・・・・・」

またもや全員が固まっている。（ちなみに、今回は俺も）
数秒の硬直の後、

『ああ！』

「ひゃっ！？」

な、なんですか！突然！と姫様ご立腹。

まあ、俺たちが固まったのは単純に自分たちがどこに居るか忘れて

いただけなんだが・・・。

「・・・忘れてましたわ」

ただ、まあうつかり口が滑ったんだろう。リズがポロツと俺たちの総意を伝えてしまっていた。

「・・・はい？」

その直後にしまったという顔をして、顔をそらしたリズだがその行為が余計だった。

「・・・ずいぶんとお間抜けな方がいるようですね？ああ、まあいかにも抜けてそんな感じがしますもんね」

「・・・（ピクッ）」

「おや？図星ですか？」

「・・・（ピクピクッ）」

案外この姫様も侮れないかもしれない・・・。にしても、相変わらず沸点の低い奴だな、リズは。

「うふふ、言わせておけば——」

「はいはい。そこまでな、取りあえず人を待たせてるんだから行くぞ」

結局俺が爆発する前に止める羽目になった。

だって、全員の視線が保護者どうにかしろや、っていつてるんだもん。まあ、「くっ、覚えていなさい」で丸く収まったからいいもののいつもなら速攻でコンボを決められてること間違いない。

一応けが人だということを考慮してくれたのかねえ？

・・・全く嬉しくないが。むしろ、普通にいつも投げないで欲しい。

（コンボの最後には必ず投げ技が来る）

「・・・そうですね。お父様達を待たせるわけにはいきません。ご案内します、ついて来て下さい」

お姫様はまだなんだか言いたそうな顔をしていたが、ここでとやかく言っても無駄に時間を食っただけだと分かったのかすぐに怒気を引っ込めた。

まあ、リズも殺気は引っ込めた。怒気は引っ込めてないんだけど。

「おお、よく来てくれた。そなた達が天上世界より来た使者の方だな？」

「まあまあ、こんなに大勢・・・」

歩くこと数分。（一人で歩いていたら間違いなく迷うな）

大広間のようなところに出るといかにも国王ですという感じの人とその隣にいかにも王妃という感じの人がいた。

え？他に説明の仕方があるんじゃないかって？だって、そのまんまだし。

まあ、とにかく普通ならお目にかかれないご身分の方たちだ。

「君らには期待しているよ。いつも、どこからともなく現れては魔軍を倒すなどと言って結局逃げ帰ってくるものが大半だからね」

「仕方のないことでしょう・・・。我らではどうしようもないのです・・・」

そうだな、と言って黙ってしまう。

何か声をかけようかと迷っているうちに執事の格好をした人たちが

「王よ、そろそろお時間の方が・・・」

「お、おお、そうか」

何か予定が詰まっているらしい。

「ではまた、ゆっくりと話そう」

そんな感じで俺達と国王との初めての面会は幕を閉じた。

各々の部屋に戻った後。

俺はルマリアさんの部屋を訪れていた。

理由は、一つしかない。武器の調達だ。

正直言つて、剣は不得手ではない、むしろ得意とするぐらいだが、盾を持つての戦闘はやったことがないからやりづらくてしょうがない。ので、近々中距離戦闘で使える『ボウガン』の入手を実は大広間までの移動時間の最中をお願いしていたので、それを取りに来たということだ。

コンコンッ

ノックをする。

「開いてます。どうぞ、お入りください」

「えっと、さっき頼んだものなだけど・・・」

「ああ、『連射式レインアローのボウガン』ですか。・・・はい、どうぞ」

そう言つてどこからともなく取り出したのは、俺が頼んでいたもののまんまだった。（本当にどこから出したんだろう？）

「消耗品についても、主との約束は取り付けてあります」

・・・抜け目のない人だった。頼んでもいないのに必要なことはすべてやってくれている。

「ありがとうございます。いろいろすみませんね、なんか」

「気にしないでください。貴方達の補佐が私の役目なので」

相変わらずのポーカーフェイスでそう言い放つルマリアさん。

「それよりも、ご自分の身を心配なさってください」

「・・・はい」

心配してくれているのはよく分かるんだが・・・もうちょっと、それらしい表情をしてほしい。

ルマリアさんにもらったレインアローは、仕込み刃がどうやら入っているようで若干、先端が重い。

「さてと、試しに撃ちたいな……。とはいえ、こんなところでバカス力撃っていたら、矢がもつたないからな」

何処かにいい場所はないかと、そのあたりをうろついているとまるで狙ったかのように、某ウィリアムテルのようにリングを頭に載せた状態で会長がこちらに向かってきた。

「……あの何してんだ」

まあ、格好の的であることには間違いないんだが……。たまにあの人の行動の要因が分からない……。。

「……考えてもしょうがないか。それに、あの人なんだかんだでずれてるし」

そう結論付けて会長の頭のリングを狙い撃つ。

カシユンツ！

ドスッ！

きゃあ！？

それにしても、なんだかものすごく聞いてはいけない悲鳴を聞いた気がする。

結構高い威力があると印象を受ける音だ。

当然だが、俺は隠れている。さすがの会長も固まっているだろうし、そう簡単にはばれないはずだ。

だが、俺のこの楽観的予測は容易く打ち碎かれる。

「……甲君。どうやら君は起きぬけに、いきなり私と戯れたいと見るが？」

ばれてた。

しかも、ものすごい笑顔でこちらを見ていらっしやる。

さらに、いつの間にか背後を取られてる。

やっぱりこの人得体が知れない……。いったい、どんな親に育てられたんだ……。。

「ふっふっふ、実は先程少しイライラする出来事があってな。スト

レス発散できる対象を探していたんだが・・・、自ら現れてくれるとは何ともありがたい」

・・・ゾクッ。

あれ？なんだか冷や汗が止まらないうえ、気のせいか寒気が・・・。

「あゝ、調子がまだ悪いみたいなんで・・・。この辺で——」

そう言いながら全力疾走し始めたはずだったが・・・

フワッ。

奇妙な浮遊感と共に天と地がひっくり返って、背中からたたきつけられた。

「ふははは、逃げない逃げない。何、悪いようにはしないさ・・・」

「わ、悪かったですって！ちょっとしたジョークのつもりだったんです！」

命の危険を過剰なまでに感じ取っていた俺は、とっさに言い訳するものの聞く耳を持つてもらったことなどできるはずがなく・・・、あっさり連行されてしまった。

その後、どうなったかは思い出すだけで鬱になりそうなので記さないことにする。

うう・・・。

「くそう・・・」

「何か言ったかい？」

「・・・何でもないですよ」

会長からお仕置きを受けてから数分後。

突然、この王国の近衛騎士だと言う人が来て王女が呼んでいるので案内することだった。

「そう言えば、まだ名乗っていませんでしたね。私はコルジュ国王女直属近衛騎士団の団長、エルベ・カーネリクスです。以後お見知

りおきを」

「あ、どうも・・・」

「・・・なんか、今おかしいことを言わなかったか？さっきは、言い忘れたがこの人はどこからどう見ても女性だ。」

「いや、ええつと・・・あなたが・・・騎士団長？」

「信じられませんか？」

「・・・ええ、まあ、正直なところ」

「仕方ありません。自分で言うのもなんですが、合っていないし・・・。それに元々はもつと風格のある人だったんです。けれど、大戦が起きた時に、たったの一夜で近衛騎士の約半数が、兵士の8割が行方知れずになってしまったのです。私達は必死に行方を捜しましたが・・・、ついに見つけることは敵わず・・・。それで、新たに志願を募って集められたのが今の軍隊です。これが男はそもそもこの国にはもうほとんどおらず、女の方が多い理由です。そして、私が騎士団長になった理由でもあります」

つまり、人員の不足。

気になるのは、どうして一斉に男が消えたのか。いくら魔王でも一夜で消せるほどの力は持っていないだろう。

「・・・今、考えてもしょうがないか」

俺はそうつぶやくとエルベさんに従って歩いて行った。

歩いて行く途中で気付いたが、確かに圧倒的に男の数が少なかった。特に騎士、衛兵は俺があつた九割が女の人だった。執事の人には確かに男の人が多いが、それでも二十人弱しかおらず戦えそうな人は数人だ。

王女の部屋に着くまでにエルベさんからはいろいろ話を聞いた。

今の状況、この国の位置、どのような敵がいるのかなどだ。

（・・・もうちょっと色気のある話はないんですか？）

エルベさんには見えていないのだろうが、俺の左隣（右にはエルベさんがいる）にはメルがいつの間にもやら霊体化しており（なんといいていいかよく分からないので便宜上こう呼ぶ）、さっきからそん

なことはかり言ってくるのだ。

（念で話してるんですから、全部聞こえてますよ？）

・・・だったら、少しは静かにしてくれ。

（はいはい。まったく、主はつれないですね・・・）

心の中でメルとも会話しながら王女の部屋に向かうのだった。

(9)「エルガルド編」王宮(後書き)

後書きは今回短めで行こうと思います

甲「なんで・・・」

考えるのがきつい・・・

甲「本格的始まった大学のレポートで忙しいだけだろ？」

・・・ノーコメントで

甲「一見、否定しているようでそういう反応は肯定と一緒になんだよな」

・・・何とでもいえ

葵「短くいくんだったら、もっと巻いたらどうだ？もっと短くなるぞ？」

甲「そうっすね。ところで、葵って誰だっけ・・・」
会長だ

甲「・・・」

葵「甲君、君は本編でも後書きでも私とそんなにスキンシップがしたいのかね？」

メル「ちよつと、私の主さまに何をしようと」

甲「だ〜!!お前がここで出るとややこしいだろ!!」

葵「・・・気でも触れたか？甲君」

あ、いうの忘れてたけどメルが意識して念を送らないと声すら聞こえないから

甲「つまり、今のは俺が突然会長に怒鳴ったと？」

そうだ、俺は作者補正で全部聞こえるし、見えるが・・・

葵「・・・見える？」

・・・そんなさげすんだ目で見るな!そういうのは見えてない!

メル「・・・大変なんですね作者も」

他人事だな・・・

メル「まあ、そんなわけで・・・主がかいちよーに用があるとか言

われて強制連行されたので補佐は私がやりまゝす」

・・・不安だな

メル「まあ、たまには気分転換も必要じゃない？」
そうか？

メル「そうよ」

まあ、いいけどさ・・・。次回には戻ってくるよな？

メル「多分ね」

・・・不安だなあ・・・

メル「来週になったら、主人公交代だったりして・・・」

笑えない冗談はやめろ。そんな風になったら俺が死ぬ

メル「どうして？」

伏線の張り直しが必要だろうが！

メル「伏線なんてあった？」

これから、つけてくんだよ！簡単なのなら一応二、三個ついてるけどメル「そう？まあ、いいけど。とりあえず今回はこのくらいですね。ではまた次回で」

あ。終わり方が普通だ・・・

(10)「エルガルド編」結末

そこから俺の体内時計（こつちに來た時に電子機器は壊れた）で数分すると、いかにもこの世界で最高級の品質で作っておりますと言わんばかりの扉が見えてきた。

すると、その正面でエルベさんは立ち止りこちらを振り向き、

「ここです。くれぐれも粗相のないようにお願いします」

粗相のないようにと言われても、こつちの礼儀とか知らんぞ？と思いなながらも取りあえず頷いておく。

そして、エルベさんがその扉を開けようとした瞬間。

ガシャアアアアン。

なんていう窓ガラスの割れるような音が響いた。

一瞬、何があつたのか分からなかつたが真つ先に部屋に飛び込んだエルベさんが

「王女！！」

とやけに切迫した声で叫んでいるのを聞き、そちらに目を向けてやつと状況が理解できた。

悪魔？みたいなのが王女を抱えた状態でエルベさんと渡り合っている。というよりもむしろ、押している。

「・・・なぜか、めちゃくちゃ強そうに見える件についてどう思う？」

実際、この国の王女直属近衛騎士団長をハンデがあるのに渡り合っているんだから強いよね、うん。

（主さまは、助けないの？）

無茶苦茶言つなよ？ただの人間の俺がどうやってあんなの倒すんだよ？

（そこはほら？知略で？）

無理だろ？限度があるって・・・。

「もうしょうがないなあ。このメルがやってあげましょう！」

「は？」

ボウン、なんていう擬音が聞こえそうな感じで登場したのは前にも見た白銀の女騎士。

現れた瞬間、王女を抱えている悪魔に接近し剣をふるう。今回は中型の剣のようだ。ただ、それにしてはなんだかやけに見難い。これは、後から聞いた話だが、限りなく純正の鏡みたいな金属を使っているので風景に溶け込んでしまう。そのため、正確に扱わないと自分をも傷つける可能性があるらしい。

閑話休題。

いきなり増えた敵に驚き、さらに二人になったことで隙ができた悪魔？が今度は追い込まれていく。壁際にまで追い込まれた悪魔は、いきなり王女を投げつけた！

「ほいっと」

それを難なくキャッチしたメルはそのまま接近して、止めを刺そうとする。

だがその瞬間、轟音と共に滑り込んできた何かがメルを弾き飛ばす。

「きゃあ！？」

そして、その何かはもはや何が起きているのか分からないエルベさんに剣を突きたてようとする。

「この野郎っ！！」

バシユ、バシユ！

二連射で射たボウガンの矢は狙いたがわずに飛んでいくが、キ、キイン。

「なっ！？」

狙い変わらず飛んだ矢が当たった瞬間、鉄に当たったような音がして矢が二本とも弾かれたのだ。驚かない方がおかしい。

だが、この時の俺はそこまで鈍くはなかった。ボウガンでの攻撃は利かないと判断して、即座に剣に切り替える。我ながら良い反応だ。「うらあ あああー！！」

気合を入れて振ったその剣は、見事に命中した。

「よし！」

「っ！？ダメです！後ろ！！」

その時、ようやく思考能力が戻ってきたエルベさんが叫ぶ。

ドシュッ！

「え・・・？」

何かが貫かれる音が聞こえて、目の前が真っ白になる。

・・・真っ白？

「・・・主？怪我は・・・？」

「え？メル？」

よく目を凝らすと、真っ白になったのではなく白銀のマントで前が見えなくなっただけのようだ。

しかし、そのマントにもおかしい部分が見受けられる。そうさっきまでは白と言って差し支えない色だった。なのに今は、徐々に赤に染まって行っている。

・・・赤？

「・・・よかった・・・、主が無事なら・・・私は・・・」
そう言うとはたりとメルが倒れる。

「・・・」

俺はと言うと固まったまま動けなくなっていた。

赤・・・つまり、血が俺をかばって剣を受けて流れた。しかも、あんなに美しかった白銀のマントを汚してまで。

「おい・・・？メル・・・？」

かろうじて息はあるようだが今すぐに治療が必要だろう。

そのためには、この事を引き起した奴らを徹底的に叩きのめさねばならない。

一刻の猶予もないし、与えるつもりもない。

そう考え、今まで何処か消極的に、流されるままに握ってきた剣を今度は自分の意思でちゃんと持つ。

この時、初めて俺は自らの意思で戦う事を決意した。その時だった。

【なればこそ、我と汝の終着の地は変わらず】

【故に我と汝は同一存在にして、運命を共にする者】

「今こそ、ここで誓おう」

頭に直接響く声に自然とそう返していた。

まるで、そうするのが当然だろうと言わんばかりに。

【汝は我の写し身なり】

自分でも何を言っているか分からないが、なぜか口が止まらない。

さらに、最後まで言い切った瞬間体に変化が現れる。

傷を負った部分は癒え、疲労感が消える。変わりに残ったのはとてつもない圧迫感。

（ぐ……、なんだ？これ）

【我が写し身よ。注意せよ。我が力と汝の魂がせめぎ合っているこの状況でもしも、少しでも気を抜けば汝の魂は消滅する】

【さあ、我が写し身としての力を発現するがいい】

「？ 貴様、何をしている」

メルを吹き飛ばした奴がこちらを振り向く。

その前に、メルを突き刺した馬鹿に思いつき蹴りを入れておく。本当なら止めを入れてやりたいが、今はこちらを睨んで構えている奴に背を向けることなどできない。

「……そうか、その力……。貴様もそつなのか」

向こうは向こうで何やら頷き納得している。

「訳・・・分かんねんだよ!!」

技術無視の特攻。

もとより、技術必要ないくらいに力は増幅されている。この分なら剣を振るうだけで奴を斬ることが出来る。

ブオオオオオン!

甲が振るった剣は風を巻き起こしながら、大威力のまま敵に直撃する。しかし、これで倒れるほど敵も甘くなかった。

「ふん、無駄な動きが多い。洗練されていない攻撃など私には届かんよ」

少し体をずらし刀身を避けると、剣風も軽くないです。

それはまるで、妖精の踊りのようだった。
フェアリーステップ

「あながち間違いではない。この歩法は、妖精に教えを請うたものだからな」

驚きが顔に出ていたのだろうか?心の内を簡単に読まれてしまう。

声からして女剣士は、そう言いながら半歩下がり、

「次はこちらから行くぞ」

剣を前に突き出すという珍しい構えをする。あれでは腕を斬り落としてくれと言っているようなものだ。

俺は即座にその剣を叩き落とそうとするが、

「だから、洗練されていないというのだ。目先の事にとらわれてしまえば、そこで必ず隙が生まれる。それを見逃すほど優しくはないぞ?私は」

と言うと女剣士の刀身がぶれ、そこから八方向から迫る剣線が見える。

「回避は不可能。さあ、我が主に勝てる可能性とやらを見せてみる」

「!? なに訳わかんねえことを言ってるやがる!!」

回避は不可能と言われているのだ。試すだけ無駄だろう。そんな事をするぐらいなら、

「・・・攻めに出る!!」

合計八の斬撃に対してこちらは一。しかし、威力としては申し分な

いはずだ。

「・・・つあああああああ！！」

「むっ！？ぐう・・・っ！」

ザ、ザザザザザシュン！

ビュゴゴゴオオオオオ！

ほぼ同時に襲い来る斬撃に内心ビビりながら（多分、キレていなかったら逃げ出していただろう）逆袈裟に剣を振るう。

拮抗したのは一瞬。

次の瞬間には互いに吹き飛び、崩れてきた瓦礫の下敷きになった。

ボゴッ！

だが、女剣士は一瞬で瓦礫の下から這い出てくる。

「・・・ふ、まさか、本当に・・・」

そうつぶやくと一瞬何事かを考え、

「よかるう。貴様に免じて、今回だけは見逃す。だが、次までもう少し腕を磨いておくことだ」

次はないからな、とそう言い残すと倒れている仲間を引きずり、魔方阵を起動させ消えようとする。

ビュオ！

その瞬間、甲が吹き飛んだ方の粉塵からボウガンの矢が無数に飛来する。しかし、それらが目標に当たるとはなかった。何かの壁に阻まれているようだ。

それを、口をゆがめながら見送ると女剣士は消えていった。

(10)「エルガルド編」結末(後書き)

メル「・・・主人公はお亡くなりになりました」

むしろ、本編からいってお亡くなりになったのはおまえじゃないか？

メル「生きてるもん」

もんって・・・

メル「私って一応人外じゃない？」

うん

メル「ならおk」

・・・いいのかなあ・・・

メル「どの道主人公は来ないわよ？」

どーして？

メル「今瓦礫の下」

前回から扱いがひどい

まあ、次回は出してやるよ・・・

メル「悲痛なことにキャラが多すぎるのよね」

どこの恋姫。双だ・・・

メル「まあ、ともかくゲームとかやってて更新はとろいけど気長に待っててね」

(11)「エルガルド編」失ったもの

女剣士が消え去った数秒後。

ドゴオン！

轟音と共に上に乗っていた邪魔くさい瓦礫を弾き飛ばす。

「・・・しかし、よく潰れんかったよな・・・。っと！そんなことより」

先程女剣士に切りかかるために横たえておいたメルに走り寄る。

「メル！」

「うん？なに？」

ズルッ、ビタンッ！

あまりの普通の返答に盛大にこけてしまった。

「いやゝ、思わず倒れちゃったけど・・・。実は当たってなかったのよねゝ」

「は？じゃあ、あの赤いのは？」

まさか、ケチャップとでも言うのだろうか？

「うん？ケチャップだよ」

・・・。

「はあゝ・・・」

呆れ半分、安堵半分の溜息をつく。

とうかなんでケチャップが・・・？某オタ○ンが持ってきたんだろうか？

ふと振り向くと、王女を揺り起こすエルベさんが見えた。どうやら向こうも大した怪我はないようだ。

「しかし・・・、誰も来ないな。これだけ騒いだ・・・というか、暴れたのに」

「・・・！まさか！」

一人つぶやいていると、メルが跳ね起きた。

そして、窓際まで駆け寄ると

「・・・やられたわ・・・」

「は？」

「・・・会長さん達、多分さらわれた」

「何をばかな・・・」

突然そんな事を言い出すメル。

それを笑ってやろうとしたところで伝令の兵士が入ってきた。

「報告します！先程、魔の軍勢と思われる者たちの強襲を受け、防衛にあたった兵士の半数が死亡。使者殿達は行方知れず。この現象はあの時と同じものではないかと！」

その場の空気が二つの意味で凍る。

一つはようやく見つけた希望が消えかかっていることに。

もう一つは友を一気に失ってしまったことに。

「・・・そんな馬鹿な・・・。あいつら、強いんだぞ？滅多なことでは負けやしないんだ。あのバカ三人だって、本気になったたら敵なしなんだぞ？」

「確かに使者殿たちは強かったです。しかし、突然現れた黒い球体に一気に飲み込まれてしまったのです。それこそ、何かをする瞬間すらなく・・・」

そう悔しそうに報告する。

「・・・ここでこうしていても始まりません。とにかく下に降りて現状確認をした方がいでしょう。それに、まだ貴方がいる。希望は潰えてはいない」

俺の目を見て、そう言うエルベさんに取りあえずついていくことにした。王女は伝令できた兵士（これも女の人）が背負った。

「そうか・・・。強大な魔力を持つ者たちの気配が、突然消えたの

はそのせいだ」

「どうやら国王は魔力の反応で少し事情を把握していたらしい。しかし、俺の仲間達が消えたとは思わなかったらしい。

それによく見ると多少怪我を負っている。どうやら国王ですら前線で戦ったらしい。こうなると、もう誰にも文句は言えず、己の無力を呪うしかない。

「しかし、君が無事でよかった。一人でも助かってくれれば、まだ何とかなるかもしれない」

「どう言う事です？」

「実は今回の奇襲を仕掛けた者たちの中にこの世界の魔王の側近がいたらしい。そいつが何かをして、君の仲間を何処かに転移魔術で飛ばしたと推測しているんだ」

「・・・」

「こちらとしても、一刻も早く手を打ちたいんだ。今、妻とゲオルグが魔術の痕跡を探している。その結果次第だが・・・」

「あいつらを取り返すことができる？」

「そうだ・・・。だが・・・」

とそこでいったん言葉を区切り、

「酷なことかもしれないが・・・。おそらく別々に囚われていると考えた方がいいだろう」

やはり、奴らもそこまで甘くないという事だろうか。

「それにいくら、君でも今すぐ案内するわけにはいかない」

「なっ！なぜですか！！」

「あそこは魔窟だ。今の力ではたどり着くことすらできない」

確かにあの状態でほとんど互角なら、今の俺なら瞬殺されるだろう。その言葉に何も言えなくなった俺は黙りこむ。

「だから、ここですばらく過しなさい」

「はい？」

「この辺りでまずは戦いの基本を身につけた方がいい。しばらくは向こうも何もできないだろうからな。それに囚われた彼らも、黙っ

て捕まってるなんて事もないだろう」

確かにあいつらの性格から言って、自分ひとりでこんなところぐらい抜けてやるぜ！とか普通にいいそうだが・・・。

「意義はなさそうだね」

「一番確実そうな方法ですからね」

「そうか・・・。まあ、今日のところはもう休みなさい」

それから、王女の治療をしてくるといいうエルベさんと別れ、自分に割り当てられた部屋へは向かわず城の中を見て回る。

城の中は奇襲を受けただけあって、ボロボロだった。そこかしこに倒れている兵士があり、それぞれ治療を受けている者、瓦礫の下敷きになった者を助けようとする者、さまざまだ。

だが耳にするのは、どこへ行っても・・・

絶望

半数以上の使者を失ったことで士気の低下は免れないとは国王も言っていたが、これほどとは・・・な。

するとそこで、小さい子供が声をかけてきた。どうやら、リスに助けてもらったらしいが

「あ、あのね。あのおねーちゃんに、これ返してあげて」
どうやらリスからお守りとして何かを受け取ったらしい。

よく見ると、それは俺が初めてリスに会ったときに渡したクリスタルでできたアクセサリのようなのだ。

了解したことをその子に伝えて、その場を去る。

今日は何かをするには、いろいろありすぎた・・・。

あの後、一番落ち着く屋根の上に登りボーっとしているとメルが話しかけて来る。

（混乱するのは、仕方ないよ。一気に友を失ったわけだし）

「混乱と言うよりも、何がどうなっているのかまだ理解できていないというのが正解だろうな」

（まあ、突然だったしね）

「それに、連絡を取ろうにもその当人につながる人物が皆目居ないし」

（それが一番痛いよね）

そうルマリアさんも結衣も連れて行かれてしまったので、兼継さんにつながる人がいない。これは連絡が一切とれなくなってしまったことを指す。それが、何よりも痛かった。何かアドバイスをもらおうと思っても連絡がつかないのだ。更に消耗品であるボウガンの矢が補充できないのだ。いざとなったら作れば良いだけの話だが、このボウガンは特殊で大気中のマナ（？）を集めてそれを付加して、射出するらしい。そして、その魔術は兼継さんとルマリアさんしか知らない。つまり、今持っている矢を打ち尽くしたら、魔王と渡り合うことすらできない。何でも、魔王はその体の頑強さ、魔力の高さで通常の物理攻撃は一切通らないらしい。・・・なんだ、その無駄にハイスペック。

（にしても、まさか会長さん達がさらわれちゃうとはなあ）

「まあ・・・それほど強かったんじゃないか？」

（ん・・・今は気にしてもしょうがないですね。主はとっとと寝てください）

「お前は？」

（意識共有してるんですから、主が寝ないと寝れないんですよ）
なるほど、と言いながら俺の意識は闇にのまれていった。

【・・・汝は、何ゆえに我を封じ込めたのだ】

「・・・俺はただ、あんたにこいつを任せただけさ」

【我は魔神ぞ。人の身でこの力を受け入れれば破滅を招くぞ】

「俺の息子だぞ？」

【だが、人だ】

「なら余計に・・・。いや、むしろ俺の器なんかよりもよっぽど可能性はある」

【？ どういうことだ】

「よく聞かないか？人間は、無限の可能性を秘めた種である・・・」

【まさか、貴様・・・。】

「そう言う事だ。子供の時に入れてしまうことにより、まだ作られる途中の器を大きくする」

【・・・よかるう。その役目、しかと記憶した。だが、良いのか？】

「いいさ。俺の息子なら、いつか自分から会いに来るだろ。んじゃ、任せたぞ我が友にして至高の魔神よ」

【心得た。またいつか相見えん事を願うぞ我が友にして、至高の――よ】

「・・・・・・・・」

（？　こゝんな、朝っぱらからどうしたんですか）

「いや、なんかオヤジっぽい人が出てきて、色々この時のために準備してきたような描写があつてな」

言っている事が自分でも分からなくなつて、考え込む。

そもそも、あれはいつの記憶だ？

（それってもしかしたら、主の記憶じゃないんですか？）

「主？」

そう言えばコイツ、あつた時からずっと主呼ばわりしてくるけど一体なんの話なんだろう？　良い機会だから、知っている事を話してもらつのもいいかもしれない。

（主ってというのは、鮎川甲という魂を守るように取り巻いている力の事よ）

「それが？」

（そう、主の力であり主である証拠）

（ふさわしくない器だと主がそのまま砕いちゃうんだけど・・・）

そうなつて無いつて事は貴方は認められてるのよ。だから、私の主でもある。そう言う事よ）

「前半は理解できたが、後半は理解できないうえに無理矢理感あふれてしょうがないんだが？」

（気にしたら負けでしょう？）

「・・・・・・・・」

なんだか釈然としないものが残ってしまったが、特に問題もないという事しておく。

べ、別に怖くなつたわけじゃないんだからねっ！勘違いしないでよ

ね！

・・・なんか、ごめん。

「・・・今日って、何かあったわけ？」

（今日から特訓が始まるんじゃないかった？）

「特訓？」

（助けに行きたいんでしょ？だったら、戦闘経験と実力がないとね。私にばかり頼られても困るし）

確かにそれはそうだ。あの後に聞いたことだが、どうやら五分から十分くらいしかメルが出てくる事は叶わないらしい。この世界ではなぜかメル力の源である『神力』が、徐々に削られていってしまうので零になる前に戻るには、その時間が限度なのだ。

（いざとなれば、消えるの覚悟で戦えばいいだろうけど）

「勘弁してくれ。お前を取り返しに行こうとしたら、神にでも喧嘩を売らなきゃ無理なんだろう？」

（まあ、神クラスだしね。階級だけなら。まあ、邪神って感じだけど）

こんな事言ったら後でひどい目にあわされるかも・・・、といった事を後悔するような声が聞こえたが俺の中に居る事を忘れているんだろうか？

「当面の目標は、あいつらの救出だ。急に人数減って若干寂しい気もするが・・・、よろしく頼むぜ」

（言われなくても、主の命令とあれば）

「では、今日は私がお相手しよう」

「・・・はい」

エルベさんが木刀を構えて、俺の前に立っている。

ああ・・・、なんでこんな事に・・・。

事の起こりは、全て王女の一言からなんだよなあ・・・。後、親バカな国王のせいだ。

そんなわけで、しばし現実逃避してみようと思う。

朝起きて、しばらくメルと話して朝食を食べた後、突然王女がものすごい勢いで突っ込んできた。

「・・・はあっ!？」

とつさに抱きとめようとしたが、あまりの事態に体が追いつかずあっさりと倒れてしまう。それ以外にも、王女の頭が割と真剣に鳩尾に入っていたつてもあるけど・・・。とにかく、話を聞いてることにした。

「昨日のお礼と、昨日伝え忘れてしまった事を伝えに参りました」

「・・・。何ゆえに、ヘッドバッドをかましながら？」

「・・・いえ、躓いただけなのですが」

なんというドジっ子・・・。

「おっと・・・。そんなことより、伝えたい事？」

「ええ、先日貴方の正式な役目が決まりました」

「役目？」

なんだろう？何かやれとは特に言われたくないが・・・。

「鮎川甲、貴殿を本日付で王国親衛隊特務部隊隊長とする」

「・・・イマナント？」

「要は、対魔王軍の部隊の隊長です。魔王軍が攻めてきた場合に限り、全軍の指揮権限が貴方に移行します」

「・・・とてつもなく物々しい部隊っすね」

混乱が頂点に達してしまい、何が何だかもよく分からなかった。

「つきましては、基礎体力とほかの兵の士気にかかわるので、エル

(11)「エルガルド編」失ったもの(後書き)

・・・超展開www

メル「自分でやつといてそれはどうなのよ」

・・・完全に主人公、乗っ取られたな

メル「コーナ―名決めちゃって既成事実作ろうかなあ・・・」

君黒いね。マントは白色なのに・・・

メル「人を見かけで判断したら痛い目に会っよ？」

・・・

メル「うん？どうかしたの？」

イヤベツニナニモ・・・

メル「なぜ片言・・・」

いや、ふとさパソコン見ながら自分に語りかけてるわけじゃん？この後書き

メル「まあ、確かにそうだね」

・・・はたから見たらどうなんだろう・・・

メル「さあ？今度録画して、みてみれば？」

・・・怖っ

メル「は？」

いや、つまり自分がネットやってるところをボーッとみるの？結構、周り静かな現状だよ・・・？なにかの観察日記みたいになってない？

メル「あながち、間違ってないんじゃない？」

・・・思考が負のスパイラルに入りかけてるからこれくらいにしておこう

メル「こんな作者を慰めてやらんでもないよ？という方はご感想をお送りください。よろしくね」

(12)「エルガルド編」お守りの秘密

一応言っておく。

こんなの勝てるわけない。

そもそも、今まで平和なところで暮らしてきたような奴がそう簡単に刀を握って、振るう段階に至れるわけがない。

ただ、そこは仲間をさらわれたことからの危機感から何とかかなりそうだったのだが……。

「いきなりこれは……、奮起するどころか萎えてしまいそうだし……」

というか心がおれる……。

「では、始めてください。危なくなったら止めるので、それまではどちらかが戦闘不能になるまで続けてください」

え？何その、鬼畜ルール。

「遠慮は無用ですね？」

「え……いや……」

「はい」

「了解しました」

……俺の意見は無視ですか？

俺の意思を全く無視して進められる会話には、もはや茫然とするしかない。話を聞かないところは、この国では国王を始めデフォルトの装備なんだろうか？

「それでは、はじめ！」

「……はっ……！」

「ぬおっ……！」

ガキッ！

ぼんやりしていたら、エルベさんが突進してきた。何とか受け止めたが手がビリビリするし、体が若干後ろにブレた気がする。というか、

「・・・なんだか木刀にあるまじき音がしたんだが？」

「気のせいでは？」

そんなわけがない・・・。

あまりの実力差にげんなりしていると、

「隙が多すぎます！」

ブオオン！

「うわっ！」

ガコンッ！

・・・やべえ、逃げたい。

「鮎川様！貴方は本当に彼らを助ける気があるのですか！？この程度で揺らぐ覚悟なら、今ここで引導を渡してあげましょう！」

逃げ出したいと思った俺を感じ取ったのかエルベさんは、そう言つて木刀を投げ捨て大剣を抜き放つ。どこにそんな力がるのか分からないが、それをくるくるとまわしこちらに構える。

「ご安心を一応刃引きはされておりますので、斬られて死ぬことはないでしょう・・・」

とってもいい笑顔でした。

一応、こつちにも鉄製の剣はあるが正直な話、あの太剣を正面から受けて折れない自信もないし、こちらの肉体が持つ保証も自身もない。

「というか、動きが捕捉できない以上、カウンター狙っていくしかないのか・・・」

そんな事を考えている間にも剣は打ち下ろされる。もはや、暴風と言って差し支えはないだろう。避けても、衝撃波で骨を砕かれるかもしれない。

「ウゲッ！！」

こちらが剣の柄に手をかけると、それを防ぐかのようにバ力でかい剣が割つて入ってくる。そのため、俺が握っているのはいまだに木刀だ。こんなもののあの太剣を受けたら、紙のごとく防御ごと突き破られるに決まっている。

ついに疲労がピークに達し、回避行動が途中で止まってしまい刃引きされた剣をモロに横腹へ食らってしまう。

あまりの痛みに一瞬、意識が飛びかけるが何とか歯を食いしばり意識を保つ。

「ぐ……」

だが、足元はふらふらして木刀を構える事が出来ない。そればかりか、思ったよりダメージが大きかったのか握っていることすら危うい。

これでは勝機を見出すどころの騒ぎではない。

「どうしました？もうダメですか!!」

「……この、野郎がっ!!」

ズガッ、バキッ!

「……っ!」

交錯し、剣と木刀がすれ違ったが……。結局、甲の剣は届かなかった。当然の結果に終わった。

「……やはり、早すぎるか」

「ですね。では、彼にはアレへ入ってもらいましょう。仲間を作ることでも可能でしょうし……」

「分かった。この件は君に任せよう」

「はっ」

甲とエルベの模擬選が終わった後、国王はエルベと甲の今後について話し合っていた。ちなみに、その場には王女もいる。

「あのお父様。でしたら私も一緒に行きます」

「……は?」

「お、王女?何を?」

「これは、王女として見聞を広めるといふ事もありますが、何より彼らを巻き込んでしまった彼らを助けたいのです」

「……」

「国王。恐れながら、それだけはよした方が……」

エルベがその提案を止めようとするが

「よからう。その代わりしっかりと役目を果たすがいい。王位継承権などの問題は、……まあそのような事を考える貴族などは全員死んでしまったが……。気にするな」

「こ、国王!？」

「まあ、今更こんな小国を乗っ取ろうと思う者もおらんだろうし、それにまだまだ私も現役で行けるからな。せめて、ゲオルギウスが死ぬまではな」

ははは、と笑いながら歩き去っていく国王を追いかけるエルベを見送った後、ベルセリアはこの事を話に行くために甲がいる医務室に向かった。

「……え？」

手当をしてもらい、横になっていたところ突然王女が押し掛けてきたと思ったら、騎士学校に入れとな？

「意味が全く分からないんだが？」

小説とかではありがち……ではないな。

「貴方の今の強さでは全く歯が立たないでしょうから……。まずはそこで基礎を学んでからだそうですよ。あ、私もついていきますから……。」（面白そうだし）」

「……今、本音が垣間見えた気がするのには気のせいなのか？」

「気のせいです」

にしてもこの王女様、破天荒すぎる。

お転婆とかならまだ分かる。がしかし、破天荒だ。・・・一体この国の王はこういう風に育てたのだろっ・・・、激しく気になる。

ただ、今の俺にはそんな事を考えている余裕はないだろう。一刻も早く全員を助け出さないといけない。いくらしばらくは手は出せないと言おうが、安心はできないしそれを鵜呑みにもできない。

「まあ、いいや。それであいつらを早く助けに行けるって言うのなら」

「そうですね。では、また明日。早速ですが、明日には通える手はずになっています。それと貴方の身分はできる限り隠して下さい。名前くらいなら問題ないでしょうが、よからぬ事を考えている奴がいるかもしれないので」

「了解した」

王女を見送った後もしばらくは、驚きで茫然としていた。

しかし、俺も素直に従えるほど時間がない事はよく分かっている。

が、このまま攻め込んだところで返り討ちにあうのは目に見えて分かっている。

結局、決められない。

いや、そんなものは決まっている。会長たちを助けに行く、だったらとつとて行くしかない。騎士学校？そんなもの、後でどうにでもなるそうと決めたら、今夜にでも城を抜け出すかな？と考えているとそこに、メルが話しかけてきた。

「ねえ、主」

「なんだ？」

「この前、クリスタルのお守り貰ってたよね？」

「ああ、これのことだろ？」

俺はポケットからそれを取り出す。

チャリッ

実はこのクリスタルは、なんでも親父が最後に残した品らしい。こ

のクリスタルの色は赤だが、もうあと何個があつてそのすべてを親父から受け継いだ・・・と言つたらいいのか分からないが。とにかく、『虹の七色』と呼ばれるこの世界には二つとない、秘宝らしいメルに母親から聞いたその話を話すと、うんとうなり始める。

「・・・『虹の七色』・・・。秘宝を人に預けるなんて・・・、いい度胸してますね」

「いや、預けたのはレプリカだ。幾らなんでも形見を人に渡すわけないだろ。それに、本物は一つのチェーンに全部つながってるから・・・。ほれ、この通り」

ジャラ、という音をさせながら首元にかかっているチェーンを取り出して見せてやる。

「・・・あ、本当に虹に見える」

「だろ？そのレプリカは、なんか友達とかに渡す用とか言つてたらしい」

「・・・意味ありげだね・・・って、あああああああ！！！」

「うお！？びつくりするじゃねーか・・・。どうしたよ？突然、大声なんか張り上げて・・・」

「そりゃ、しょうがないじゃないですか！これがあるって事は・・・」

「？ どうしたんだよ、さつきから」

「主・・・。その『虹の七色』・・・。全部を握りしめて、『我は汝ら主なり、今こそその力を顕現させよ』と唱えてみてください」
「なんだかよく分からないが、メルが必死なのは何となくわかったので取りあえず、言われたとおりにしてみる。」

すると、『虹の七色』が輝きだす。

目の前が光で包まれる。そのせいで、前が見えないが・・・。
しばらくすると、光が徐々に治まり、目も慣れてくる。

そして、光に包まれていた『虹の七色』は刀になっていた。

「・・・え？」

なんだこのマジック・・・。

「やっぱり・・・、『七閃^{しちせん}』。こんなところにあつたのですか」

『うむ、メルよ。久しいな』

「・・・は?・・・え?」

「ええ、お久しぶりです」

『しかし、その名は不適切だ。また改名せねばなるまい、主は変わったのだ』

「そーでしたね」

「・・・刀がしゃべってら・・・何事?

「お、おい・・・」

『む?失敬、お主が新しい主か?』

「え?」

「そうですよ」

『そうか、では早速名前を決めてくれ』

「あ、主!私にいい案が!」

『却下だ!』

「えー、どうしてですか!」

『どうせまた、とんでもないのをつける気だろう!』

「う・・・こいつがいじめる。たすけて」

『む!そなたはこやつの味方なのか!』

「もちろんじゃないですか!」

『なに!』

「なんですか!」

「ちょ!てめええらああ!!状況の説明ぐらいしろやああああ!!」

(12)「エルガルド編」お守りの秘密(後書き)

メル「何か来たよ？」
来たな

メル「擬人化にまで手を出したの？」

いずれそうなるかも・・・ってか、そうなるんだろうけど今、そんな風に言わなくていいだろ！！

メル「性別とかどうするの？」

考えてない。こいつはなんとなく、騎士学校編は後回しにするかな？とか思ってたただけだし

メル「それがたまたま、お守りの意味の伏線回収になったの？」
そんな感じだな

メル「また適当な・・・」

ナナ「こんなんで成立するのかの」

うお、本編でも場外でも唐突にわくんだな・・・

ナナ「わくとか言うな！」

ちなみにこいつは、”しちせん”な変換するのめんどいからしないけど

メル「・・・大した手間じゃないわよ」

ナナ「まったくもってその通りじゃ」

こいつについては、追々わかっていきます。とりあえず今使えるのは・・・まあ次回までには考えておくよ・・・

メル「キーパーソンではあるの？」

そりゃそうだ

ナナ「言ってしまうと・・・(フガフガ)」

言わせないよ？！なに自分の能力自ら暴露しようとしてんの？！バカなの？死ぬの？

ナナ「死ぬのは貴様だ、作者！どこを触っている！」

は？ちょ！待て！お前の性別を女だと言った覚えは・・・

ナナ「なくても、体はそういう風に出来ておる！」

ええー・・・そんな理不尽な・・・

メル「世の中そんなもんよ」

お前が何を知っているというんだ・・・

ナナ「とにかく！天誅！！！！！」

ウワアアアア！！！！（ぐしゃ）

＊作者終了のお知らせ

メル「さて、社会の理不尽に飲み込まれた作者はほっておいて。次話からは、主人公の力の片鱗が少しずつ見えていくかも！」

ナナ「そして、王女はどうするのか!？」

・・・ど・・・うも・・・しな・・・い・・・

ナナ「なんじゃ、しぶといの・・・」

ズドオオオオ（プチッ）

ナナ「汚物は消毒だー！！！！っ！！！」

ゴアアアア（ジユウウウ）

ナナ「滅菌が完了した」

メル「埋めておきましょうか、灰」

ナナ「そうだな」

メル「では、皆さん。私たちはこれから作者・・・もとい、灰を埋めてきますので、今回はこのくらいで」

ナナ「安心するがいい。作者は、畑に何本も生えている」

（え？俺って代替可能な！？聞いてないけど！！）

ナナ「・・・しぶといのう・・・。思念体にまでなつて、生き延びるとは」

メル「ええ、本当に・・・」

（まあ、いいや。とりあえず、終わりのあいさつをしておこうや）
二人「では、また次回」

（次回は華麗に復活、作者様！）

ナナ「抜くだけじゃ」

（ええ！俺って大根感覚！！）

ナナ「阿呆！それでは失礼だ、大根に」

（うそん・・・）

(13)「エルガルド編」脱走

『虹の七色』から出てきた訳の分らん刀。

事情の詳細な説明を求めるために、メルとそれを落ち着けるのになりの時間を食ってしまった。

「・・・つまりだ。これは親父の残した一振りだと？」

「そう言うことらしいですよ」

『うむ、簡潔に言うтそう言う事だ』

「・・・魔神と友達で、こんな刀を持つてる俺の親父っていったい何なの？」

「私が聞きたいですよ」

『ふむ・・・。まあ、いつか分かる時が来る』

刀の方は何か知ってるらしいが、尋ねても『いつか分かる』としか答えないし、メルはメルで『こっちが知りたい』って言ってるし・・・。

こんなので大丈夫なのかよ・・・？

『それで主？とつと銘を決めてくれぬか？』

「銘？」

「刀の名前の事ですよ」

「・・・ふん。そうだな、『虹の七色』から出てきたわけだし、それにちなんだ奴がいいよな・・・。分かりやすいし」

とは言ったものの、こういうものに名前を付けた事のない俺には難題だ。どうしようか、と悩んでいるとメルが

「もう『七閃^{しちせん}』でいいでしょう」

「ああ、まあそれでいいか」

『な！メル！貴様！』

「なんですか？やるんですか？だったら、表に出てきやがれってんです！」

『・・・よかるう。後悔させてやろうぞ！』

「あれ？良いんですか？主がいるのに、その姿をさらして」

『問題ない。こやつは、特別だ』

「・・・え？」

メルが顔が一気に蒼白になる。

どうやらまだ何か秘密があるらしいが、その秘密はメルが有利で七閃は不利になるものだったらしい。出来ないと高をくくっていたのが、できると言うのだから戦慄したのだろう。

すると、またもや光が先程と同じように刀を包んでいく。

俺は俺で成り行きを見守っていると、

「ふむ、なかなかの調子じゃ。重畳だの」

今度は美少女が現れた。

・・・は？これなんて（ry

「・・・」

俺は俺で美少女が出てきた事に驚いていたが、メルの驚きはまた別だったようだ。顔面蒼白だったのが、今度は冷や汗までかき始めている。

「さて、この姿でははじめましてじゃの主」

どうやら、まだ説明をしてもらわなきゃいけない事があるらしい。

「ほう、つまりお前は、形態変化した刀ってところか・・・」
「うむ」

どんな技術使ったらそんな事が出来るんだ、とかいろいろ言いたい事は残っていたがどうせ聞いてもまともな答えなんか返ってこないの、その辺はすっぱり諦めて、無理やり自分を納得させることにした。

「・・・さしずめ、呼ぶならナナってとこか」

「・・・・・・・・」

そう言うとナナは固まっていた。

「？ どうしたよ？」

「いや、そなたは親父殿と同じ呼び方をするのだな」

「そうなのか？まあ、分からないでもないかな。だって、今の姿はどっから見ても人だ。っーことは、君は人と同じだろう？なら、そういう風に扱わないとな」

「ふ、ははははは！そうか、そうか！さすがは、あ奴の息子か。だが、刀の状態の時は遠慮はいらん。そんな事をすればお主が傷つくからの、それだけはやめてくれ」

「分かった」

そんな感じで、ナナと話しているとメルが不機嫌そうに

「我が主は、節操なしでいやですね」

とか言ってくる。一体何の話をしている……。相手は、美少女とは言え刀だぞ？綺麗な花には刺どころか、刃がついてるじゃないか！

「ふん、嫉妬か？見苦しいなあ、魔神の使い魔よ」

「ぐっ……。そっちこそ、道具の分際で！」

「なんだとっ！？」

「なによっ！？」

どうでもいいが、この状況。はたから見たら、ただの女たらしだけど主観的に言って人外二人に詰め寄られてるわけだから、心臓に悪いだけだよな。

「一々喧嘩するなよ。取りあえず、今のところ俺の本当の味方はお前ら二人ってところだな・・・」

「？ どういう事じゃ？ここに居る者たちも味方であろう」

「ま、今夜抜け出すからな。どっちかと言うと、これから裏切るんだよ」

「抜け出す？」

「そ。まあ、時間があるなら騎士学校とやらに行ってもいいが、今の状況ではそんなこと言ってられないからな」

「・・・そんな簡単にはいかないと思うがな。特にあの姫・・・、何かを企んでおるような顔をしておったしの」

「??」

なにやら、ナナがブツブツ言っていたがひとり言のようだったのでスルーする。

「それで？いつ抜け出すのですか？」

「まあ、善は急げと言っしな。人氣が消えたら即だな」

それから、数十分後。

「どうやら、見張りは集中力を切らし始めたようですよ？」

「なら、実行するぞ。いいか、喧嘩すんなよ」

「・・・分かった（了解です）」

互いを見合つてもものすごく嫌そうな顔したが、それも一瞬の事。すぐに切り替えて、抜け出す機をうかがう。

「・・・今です」

メルがそう言い、彼女を先頭にしてナナ、俺と続く。ここから取りあえず、外に出なくてはならない。しかし、城壁を乗り越える力なんてないので門から出るしかない。RPGみたいに地下水道が都合よくあつたりはしないだろうし、何よりそう言うところの方が普通、警備は強固だ。

「・・・それで？どうやって抜け出すのだ？」

「・・・そうだな」

そこで少し悩む。

これは、ちと頭を使わなきゃいけないようだ。

仮に、外へ出たいと言つてもこんな時間だから、不審に思われる事請け合いだ。出来る事なら、この城からある程度離れるまで気づかれたくはないしな。

そうなると、朝までは誰にも知られない方がいい・・・。

・・・門の警備状況次第だな。

と言う訳で、敢えて正門にやってきた。

なんでかって？こつという時、正門の方が案外警備ゆるかったりする

んだよ。まあ、比較的って言うだけで十分に嚴重なんだが……。ほら、それでもさつき見てきた裏門の二十人体制よりはマシな、十人体制だ。……半分か。

「・・・十人か。全員気絶させてもいいんだろうけど・・・」

「どうする?とメルが聞いてくる。」

つまり、メルには大した相手ではないという事か。それなら、気絶でも・・・。

「それはだめです。そんなことしたら騒ぎになりますよ？ 全く、勝手に抜け出しちゃだめじゃないですか」

「ですよね……って、え？」

「……主よ。後ろを見てみい……」

恐る恐る、後ろを振り返ってみると

ר. . . . (רנר)

目が笑ってないです、
ママ。

「全く、抜け出すならそうと云ってくださればいいのに……。そうしたら、私が手引きして差し上げたのに」

「……え？」

これは予想外だった。

この国の人間なら、救世主ともとれる人間をそう簡単に手放すわけがないと思ったからだ。

「その代わり、と言っではなんですが……。私も連れてって下さいな」

「え？」

これまた、予想外な出来事が起こった。手引きしてやるから、私も連れてけとな・・・？

「何故？」

「え？」

.
L

「・・・・・・。まあ、良いじゃないですか！」

「ええー・・・」

今の間がものすごく怖いんですが・・・。

「とにかく、今から、正門の警備を数分間ゆるめます」

「どうやって？」

「企業秘密です」

頼むから、変な事だけはしないで欲しい。

「ってあら？」

何かをしようとした姫がその動きを止め、驚いている。

「どうした？」

「いえ、それが警備の方々がなぜか急に休憩に入り始めたんですよ」

「・・・。怪しすぎるが・・・、同時にチャンスだな。メル」

「了解です」

すぐにメルに先行してもらい、周りの状況を確認しながら彼女についていく。列の最後を走る俺は、誰かに見られているような気がして城門を出たところで、一瞬動きを止め後ろを振り向くが、

「どうしたのじゃ？」

ナナにそう言われて我に振り返りすぐさま振り返り、走り出す。

「・・・おつかしいなあ・・・」

ちなみに、振り返った時そこには不自然なくらい静まり返った城門があるだけだった。

「ふむ、気付かれはせなんだか」

「あの・・・、本当によろしかったので？」

「ああ、いずれにせよ彼の行く場所は変わらぬ。それにな・・・」

一国の王である彼は、昔一緒に旅をした友がいた。彼は、自由奔放で気まぐれだった。しかし、彼は自分でやると決めた事と自分の世

界、つまり一度でも縁が有った事のあるものは何人たりとも見捨てようとはしなかった。

その姿を甲に見たのだ。

「……それに？」

「……ふ、おそらくだが。彼の父親に『息子をよろしくな』と言われているのでな。これくらいはせねば、なるまい」

「はぁ……？」

なんだかよく分かっていない表情をするエルベ。

それを尻目に、てくてくと歩き去っていく国王。

すると、そこに王妃がやってきて

「うふふ、あの人もいろいろ考えているのよ？」

「王妃！？す、すみません！幾ら、王の命令とはいえ王女を……」

「いいのよ。どちらにせよ、この国の王家はいつかは旅立ち、国を治める者としてふさわしい教養を身につけなくてはいけないのそれが少し早くなっただけよ」

「……は、ありがとうございます」

「じゃ、私も寝ることにするわ」

「え？」

そう言つて、立ち去ろうとした王妃が突然足を止めて

「だから、これから何処かの誰かが城門をくぐっても誰も目にすることはないわね？見張りの兵が戻ってくるまでの間は……ふふ、じゃおやすみなさい」

そんな事を言い出した。

エルベは、これではまるでそんなに心配なら自分で行きなさい、と言われている気がした。

その上、エルベは今まで王女につける事が己が天命としてきたのだ。

「……はい、おやすみなさいませ」

王妃の背に深々とお辞儀をすると、ぼそりと

「ならば、行くほがあるまい……！」

そう言つて、駆け出した。

少し前に、城門をくぐった王女たちに一刻も早く追いつくために。

そして、王妃の方は。

「全く、上が上なら下も下ね？」

「・・・むう。仕方あるまい、どちらも娘だからな」

「あらあら」

心配性な国王と

「だって、エルベ様があんなにお辛そうな表情でこの城を歩かれたら、一日と経たずしてこの城は落ちてしまいます」

そうだ、そうだと同調する心配性な衛兵達。

それらが隠れて、様子をうかがって居たのだ。

おそらくエルベは気付いていない。それほどまでに王女の事を気にしていたのだ。

「でしたら、彼女達が帰ってくるまでの間、この城を落としてはなりませんよ？」

「もちろんだ」

「了解です、王妃様！」

変な方向で士気の上がる兵たちを前に苦笑するしかないのだった。

(13)「エルガルド編」脱走(後書き)

ほいほい

メル「今回はやたらと早いわね」

家でごろごろ(r y

もとい、勉強してたからな

ナナ「もうすぐテストも近いだろうに・・・」

いいんだよ

メル「本当ですか？」

・・・多分

ナナ「恐ろしく不安にしかならん答えじゃな」

メル「大切にしている祖父母にお金払ってもらってるんだから、きっちりしてくださいよ」

ナナ「そうじゃな、敬老の精神じゃ」

分かってるよ

メル「・・・。ナナ、お茶いる？」

ナナ「おお、感謝する」

メル「お茶菓子は？」

ナナ「む？すまぬなあ」

ナナ「なんじゃ・・・？この違和感は・・・。突然態度が・・・」

メル「だって、お年寄りは大切にしなきゃ・・・」

・・・さて、ここでも貴様らの戦争を起こす気か！俺は主人公補正も何もないただの人なんだからやめろ！巻き込まれて死んでしまう！

ナナ「むしろこの場合は、おぬしが標的じゃろう？」

なぜ！？

ナナ「なぜ？——それはの・・・、この設定にした作者だからじ

や、ボケエエエエエエエエエ！！！！」

そんな理不尽な、ギャアアアアアアアアア！

メル「社会なんてそんなもんよ」

[illegible]

ナナ「ええい！しづといわ！」

いや、だからちよ！おま！だから、待ててえええええ！！イイイイイヤアアアアアアアア！

＊
規制＊

ナナ「ふう、諸悪の根源は滅びた」

メル「……、今までの比じゃないわね。やられっぷりが」

メル「まあ、来週には復活してるだろうから」

ナナ「更新を楽しみにしている方は、しててください！」

二人じゃね／＼

ナナ「作者がいないと、普通のあいさつなんだな」

メル「突っ込みがないと、ボケがさえないじゃない」

ナナ「なるほど」

(14)「エルガルド編」強襲

「……ここまでくれば、問題ないでしょう」

メルがそう言つて、足を止める。

城の城門から出て街道沿いにまっすぐ、小休憩を挟みながらが……。それでも、かなりの距離を走った。体力的には限界だ。

「……なら、休憩しようぜ。さすがに倒れそうだ」

『だらしがないのう……』

いつの間にか刀剣状態に戻ったナナが言う。ちなみに、刀剣状態の時は基本的に俺の腰にぶら下がっている。

その言葉にムツときた俺は

「そう言うなら、お前も走れよ……。結構重たいんだぞ」

『いやじゃ』

「もうそこまでの即答だと、いつそ清々しいよ……」

うんざりしながら、街道沿いにあった木にもたれかかる。これで少しは筋肉を休める事が出来る。

王女の方と言うと、案外平気そうだった。

「？　なんですか？」

「いや、お姫様なのにずいぶんと体力があるんだな……」

「そう言う事ですか……。それはですね……。元々王家は冒険者の家系だったのです。そのために王位を継ぐときには国中を旅してまわるといふものがあるんです。その時のために、王家ではいつも修行を欠かさないんです」

「そうなのか……」

つまり何だ？俺なんかより、もしかしたらよっぽど強い？……。あれ？なんだか目から水がこぼれそうだよ。……。ん？涙じゃないよ？

(哀れじやのう)

違うし！泣いてないもん！

(誰もそんなこと言っておれはせんだろうに)

・・・。

「・・・そんなことより、追ってが来てはいないか確認してくださいよ」

「その心配はないだろ。さすがに、この距離だから」

『しばらくはないと思って・・・』

問題はない、と言おうとしたであろうナナが突然ぴたりと静かになった。

「どうか・・・」

『静かにせい』

したか、と続けようとした俺を遮ってピリピリとした気配を発するナナ。その意識は、どうやら俺達が通ってきた街道に向いているようだ。・・・まさか？

（そうじゃ、ものすごい速さで迫る気配がある。あれは相当に強い部類の人間じゃ。このままじゃと・・・、あと数秒かの）

そんなに早く、追いつくのか！？

（うむ、気付くのが遅れたの。今更、逃げても意味はないじゃろうしおそらく向こうもこちらを捕捉しておる）

くそ・・・。

（・・・まあ、この気配から言ってそんなに心配する事はないんじゃないかの）

は？追ってきてるのに心配する必要があるのか？

（そう言う事じゃ）

「どうかしたんですか？二人とも」

メルが不思議そうにこちらを見ってくる。

「いや、なんかものすごい勢いでこっちに向かってくる気配があるらしい」

「え？それって、早く逃げないとまずいんじゃないか？」

「いや、それがそうでもないんだって」

「へ？」

メルがポカンとしている。

『むっ！？いかん！コウ！襲撃じゃ、左手がわからじゃ！あまりにも追ってくる気配が大きすぎて、気付けなんだ！！』

「こんなところに王女がいるなんて儲けもんだぜ！」

ナナがそう言い終わると同時に、ちょうど左手方向からいかにも盗賊っていう恰好をした奴が出てきた。

「もうちよつと、ひねった格好しやがれっ！！」
ガスッ！

ちよつどいい位置に出てきたのでとっさに左脇のホルスター状の部分から引き抜いたボウガンの銃床（？）で額を思いっきり叩く。すると、面白いくらいにクリーンヒットして吹っ飛んでいき、木の幹にぶち当たりずると崩れ落ちる。どうやらそのまま気絶したようだ。

「うっし！」

『油断するな、数だけ多いぞ！』

ナナがそう言うてるそばから、今度は三人同時に斬りかかってくる。しかも、かなり切れ味は良さそうな剣を持っている。

ビュン、ヒュン、ピッ！

「うお！？」

どうやら一人は、レイピアみたいなものを持っているらしい。ものすごい勢いで突いてきた。辛うじてかわせたからよかったが当たっていたら穴があいていそうな音がしたな……。勘弁してくれ。

「この・・・っ！！」

バシユツ、バシユツ、バシユツ！

こちらボウガンで応戦するが、いかんせんこちらは長、中距離系の武器だ。ここまで接近されたら、当然のことながら当てづらい。

しかも、こういう盗賊っていうのは大抵、刃に毒をぬっている事が多い。ここまでテンプレートで来ると、逆にそうでないといふ事が多い。その証拠に俺がかわして、それた刃が刺さった木の幹が若干変色している。どうやら、致死性の毒ではなく麻痺の類のようだ。

「ふん！当たらないよ！」

襲ってきたうちの一人は女だったらいい。しかも、妙に動きがよくてボウガンが掠りもしない。これはやばいかもしれない。

「この距離では、逆に当てづらいだろ！」

ビュン！

女にはあるまじき剣速で剣を振ってくる。

それを何とか、紙一重でやり過ぐすと周りの状況を確認する。取りあえず全員無事だが、全員襲われている最中で誰かが誰かを助けている余裕はないようだ。メルや王女は俺なんかよりも相手をしている人数が多い。

「他の奴の事を気にしている余裕があるのかい?!」

ビュ、ビュンッ！

今度はさっきよりも更に速い！

慌てて回避するが、肩口に当たったようでヒリヒリする。

「当たったね。言うまでもないだろうけど、麻痺毒が塗ってある。

しばらくしたら、指先すら動かなくなるだろうよ」

「はん、毒がまわるのには時間がいるだろ」

「・・・それでも、数分しかない」

「十分だ」

『大丈夫なのかの?』

任せとけ、お得意のハツタリをお前に見せてやるよ。

(は?)

いや、実は結構ビリビリ来てる。正直数分ないな。

(まさか、そのハツタリをかましたまま奴を倒すと?・・・無茶じゃ! 万全でないと)

まあ、大丈夫だろ。

ナナと念話というか心話というか・・・とにかくそういうものを終わらせ、構えをとる。構えと言っても、ボウガンの矢の先端が盗賊(女)に向くようにしているだけだが・・・装填されている矢は残り三本。この三本の使い方次第で、勝敗が決まる。

「・・・全部避けられるもんなら、避けてみる!」

バシユッ！

「は！私に、当てられるならね！」

相変わらず簡単に避ける。この距離では狙いも確かに付けづらいが、これだけ近いと適当に射ても、速度がかなりあるので簡単に当たるはずなのだ。なのにこいつはすでに四本避けた。正面から射ても、当たらないという事だろう。

ならば、避けさせなければいいだけの事！

バシユッ、ベキッ！

「く！」

一本射た後に、それを追いかけるようにして射る。すると、避けきれないと悟ったのか剣ではじく。一本目が弾かれたが、二本目の狙いは彼女の背後の樹。そこには、等間隔で打ち込まれた矢がある。これは、さつきから避けられていたはずの矢だ。そして、最後の一本には火がともっている。更に、打ち込んである矢には火薬。

これを奴が認識する間、約三秒。

ドカンッ！！

「・・・っああー！」

爆発だけで死ななかったのはさすがと言うべきだろう。

だが、爆発後に俺が追撃に出るのに約五秒。

女盗賊が追撃に気付き、防御をしようとするにはあまりにも時間がなかった。

しかし、追撃の一撃を放とうとしたまさにその時。麻痺毒の影響が現れた。

（・・・っ！！）

そのせいで一瞬動きが鈍る。これは、動きの速い者にとっては必殺の間合いから逃げる好機であり同時に、自らが反撃に出るチャンスでもある。そして、女盗賊は動きが素早い。

故に。

こちらの必殺の一撃はかわされ、またもやそのスピードの翻弄され始める。

「くっそ！」

シュン！ヒュン！

「うおっ！」

今のところは紙一重でかわしているものの、スピードの差は歴然としている。これでは、いずれ避ける事が出来なくなるだろう。

そのすぐ隣では、すでにメルが二十人ほど気絶させている。メルに挑む哀れな盗賊は、徐々に増えつつあるがいかんせんメルが強すぎて数秒すらもっていない。こちらは問題ないようだ。

なら、やはり問題はこちらだ。

「戦いの鉄則くらい知ってるでしょ？弱い奴から、先に消えてもらう。だから、貴方に対して体力は使えないのよ！」

「う、うらあああああ！！！」

風を斬りながら、突っ込んでくる女盗賊に対して速度で劣り、それを捕捉することもできない俺は防御をする術を持たない。故に、攻めに転じる。攻撃は最大の防御、剣を以って盾となす。

だが、当然防御せずに攻撃する分隙も大きくなる。

ザシュツ！

「うぐっ！」

「イノシシじゃないんだから、突進だけじゃ人には勝てないわよ？せめて霊長類に進化してきてからもう一度来なさい」

「・・・っは、く」

毒と痛みで意識が飛びかけるのを必死につなぎとめる。生命線はここだ。ここで耐えれば俺の勝ち、もし耐えられなければ俺の負け。なぜならば、こいつの攻撃の癖を読む事が出来たという事もあるし何より、あと少しでおそらく・・・。

「止めよ！死になさい！」

しかし、そんなものを許してくれるほど敵も愚かではないらしい。なんとか、防御しようと手に力を入れて踏ん張ろうとしたところだった。その影が（盗賊のせいですっかり忘れていた）乱入してきたのは。

「・・・ふん、間抜けが。そんなので、貴様は王女を仲間を救おうと言っのか！」

そう言つて、俺の目の前に立ちふさがると俺が全く捕捉できなかった帝の動きが全て見えているかのように、いや実際に見えているんだろつが・・・。その攻撃すべてを防ぎきっていた。拳句には、
「く・・・」

手傷をカウンターで負わせていた。

「やはり王女には私がいなければならんだな」

そこには、王女直属騎士団の団長エルベ・カーネリクスがいた。

(14)「エルガルド編」強襲(後書き)

遅くなりましたが、何とか戦闘半分まで行きました

メル「今回は時間がないわね」

うん、明日バイトだもん

メル「も」

も、じゃないだろ作者の危機だろ。おもに懐の

メル「別にリアルの効果はいらな(r y」

・・・二次元に生きろってか？

メル「今日はやけに自虐的ね」

ちよつと精神的にキマツてんダヨ

メル「・・・ま、まあ今回はこれくらいにしよう・・・？ね？」

ああ、そうだな。くくく

メル「マジできてるわ・・・この子」

メル「そういうわけで、もとに戻ったら書き直すわ」

ナナ「ちよつと、待っててくれたもつ」

メル「いいトコ取り!？」

ナナ「ふはははは!!」

(15)「エルガルド編」魔王登場

「な、あんたがどうしてここに！」

「愚問だな。王女あるところにエルベありだ」

突然現れて、疾風のごとき剣戟で女盗賊を一瞬で窮地に追い込んでいる。

「貴方は……。そう、確かに貴方がいてもおかしくはないわね」
俺が茫然としている横で、何やら納得している奴がいる。件の彼女だ。自分が窮地に追い込まれている事も何でもないかのように冷静に状況把握している。

「助太刀してはやらんぞ。この程度の相手を倒せぬようでは魔王打倒など到底不可能だ。何より、私がこの剣でお守りするのは王女唯一人だからな」

「……。そりゃ、結構なことだ」

なんだか妙に手厳しい言葉に投げやりに返す。

しかし、どちらにせよこれはいいい機会だろう。今持てる自分の力をすべて出し切る。それで勝てないようなら、死ぬしかないという事だ。ただ、死期が少し早まるだけで結果は変わらない。

(さあ、俺の中に居座る魔神よ。俺に力を貸せ。どの道このままでは俺はここで負けてしまう。負けたくない、こんなところで負けるわけにはいかないんだ！)

【ならば、祈るがいい。お主が真に望む力の形を】

【祈ればあるいは……。届くのやも知れん】

【届かなければ、それはお前が力の形を意味を履き違えているから答えぬという事なのだろう】

(祈る……。それは、願うのとどう違うのだろう。さっきから力は願っているが一向にその力の形とやらが分からないし、つかめない)

【ならば、お主の願いとやらは筋違いと言う事だろう】

「あてにならん力だな」

「？ 何か言ったか」

「別に」

心の中で言ったつもりが声に出ていたようだ。

【・・・一つ助言しよう】

（なんだよ？）

出来る事なら助言ではなく、助力してくれるのが一番なんだが・・・まあせっかく助言してくれるっていつてるんだから聞いておいて損はないだろう。

【敵を見ない事だ。お前には戦闘は向いていないようだしな。大局を見るようにすれば、違う物が見えてくるかも知れんぞ】

（・・・ためになる助言ありがとうよ）

「何をボケつとしているのか知らないけど、この隙を逃すほど甘くはないわよ？」

どうやらかなりの時間ぼんやりしていたらしい。

後頭部に思いつきり衝撃が来たことにより、現実に一気に引き戻された。

「つつう！容赦ねえなあ・・・」

うんざりした声音で言ってやると

「ふん！知らないわよ」

しかし、困った。現状ある武器で戦おうと思うとどうしても無理が出てくる。ボウガンでもできない事はない。ただ、そうなるのかなり戦略的に幅が狭まる。

『・・・お主、すっかり我の事を忘れておろう』

・・・あつたあああ！こんなところにちよいどいい武器が！！そうだよ、わざわざ腰にぶら下げて何チャラチャラやってるんだ俺は・・・。

『まあ、主は我を抜きたくないらしいが』

「いや、抜くさ。ここで抜かなきゃ何もできないまま終わる」

チャキ、という音と共に剣の刃が姿を見せる。

それは恐ろしいまでに鋭い。しかし、同時に人を物を斬るためにどこまでも鈍い輝きを持つ。

「へえ……。良い武器持つてるじゃない」

「……」

武器は最上級、ならば後必要なものは己の覚悟と力だ。

【そなたに関して言えば、覚悟だけだ】

【さあ、我が ○×?!●としての資格を見せてみよ】

なんだ？何の資格だつて？

【今は、そなたに必要なき事。いつか、知るべき時に知ろうぞ】
そう言つと奴の気配は消えていった。

……。よくは分からないが、とにかく俺の主としての素養が試されるらしい。

ああ、なら見せてやる。これが、鮎川甲の覚悟だ！

「？ なに？この気配は……」

甲の周りの植物が生物が枯れ、生き絶え、炎上する。一瞬のうちに、周辺の生物はすべて甲に食われてしまったのだ。

【……。やはり、相性は最悪のようだな。これでは、何が力の本質が見失ってしまうだろう。それでも、お前は後悔していないと言うのか……。】

何やら、魔神がブツブツと言っているが関係ない。この場でこいつを倒す。そう決めた。そう決めた以上、甘い事は言つてられない。

例え、殺すことになつても道を開くために……。仕方がない、そうだこれはしょうがない事だ。

「く……。そう、私を殺すのね。なら、覚悟しなさい。貴方のような善人は人を殺した自分を許せない。いつか自分で自分を罪悪感で押しつぶす」

そう心では分かっていても、体が、頭が正常に働く事を拒否している。こんなことは間違つているとこんな事をして、解決には至らないと。

【ふふふはははは！！おもしろい、実に愉快。さあ、時間はない

ぞ。だとしたらどうする。全てをすくい取りたいのだろう？お前のあこがれる”主人公”とやらは、誰かを傷つけて満足なのか？」
「黙れ、そんな事は俺が知っているしこの物語は俺の物だ。なら、」
「【なら、誰もが笑っていられる幸せな未来を望もう！】」
その瞬間。魔神と俺の声が重なった瞬間。先程まで枯れ落ちていた植物が、生物が急速に力を取り戻していく。そして、燃えていた火が消えたところに緑が、生物の活気が元に戻る。

【それは誰も知らず】「故にすべてを知る」

【我はすべてを記憶しよう】「俺が全てを語ろう」

「パワー・オブ・ロキ【悪戯な魔神！！】」

【こちらが先に発現したか】

相変わらず魔神がぶつくさ言っているが、取りあえず力を具現することはできたようだ。その証拠に力があふれてくる。

【過信はするな。この力は、所詮お前の物ではなく借り物だ】

そう言い残すと気配が今度こそ完全に消え去った。

「なによ、それ？なんなのよ！！」

女盗賊は焦っていた。

今更だが本来、彼女は盗賊などではない。真正正銘の魔王の配下だ。人間の姿をしているが、魔神の一種であり名をウエルデダンテ・シユトウルム・ヴァルトと言う。さて置き、彼女は魔神故に目の前に立つ者の異変が、異常がよく分かる。魔神にも格と言う物がある。そして、目の前につ魔神を宿した人間は、彼女よりは下だ。だが、明らかにおかしい。人間が魔神を宿すなど、魔王の配下であるはずの魔神がなぜ人間に味方などするのか。

その上に、どうして魔力が毎秒ごとに跳ね上がっているのか。

謎だらけだった。

一つ分かるのは目の前にいるのが一種の究極を表しているであろうことだけ。

「く！そっちがその気なら、リミット・バースト限定解除！！」

ウエルデダンは、魔王の配下になる際その力の一部を封印することで普段の消費魔力を最低限に抑え、有事に備えるようにしている。封印している理由としてはいざとなったら、魔王を裏切ることも視野に入れていると言うのもあるが、これは魔王に従っている魔神すべてに言えることだ。

ともかく、その封印はかなり強いもので事実上魔力の量で言えば右に出る者はいない。しかし、目の前にいる敵は徐々に彼女のそう魔力量に追いつきそうなのだ。

（なんなのよ。この私の魔力量に追いつくようなものの存在なんて知らないわ）

そう、魔王が生まれてからの魔神であるウエルデダンは知らない。過去に原初より存在した伝説の魔神の事を。その魔神が今は人間に味方しているなどとは。

「なんだって言うのよー！！！！！！」

そして、キレてしまう。

戦いにおいて、戦術はさることながら一番必要な事は冷静である事だ。どんな戦術も冷静にこなさなければ、どうしてもブレが生まれる。そのブレを隙として捉えられたら、一巻の終わりなのだ。

『これほどの好機は二度とないやもしれん。今のうちにこうげきをしかけるのじゃー！！』

「おう！」

ただし、それはある程度の実力しかないものの話。戦闘狂や一流の武人はそんなものは関係ない。そして、ウエルデダンは後者だった。

突っ込んでくる甲に対して、今度は油断も傲慢も何もなしで対等な

自分の存在を脅かす外敵として構えを取る。

振り落とされる剣戟に対しても、先程までとは明らかに違う気迫で挑んでいる。

つまり、ここからが真正銘の真剣勝負。

キレても自分が何をすべきか見失わない敵ほど厄介なものはない。先程のスピードの倍以上の速度で攻撃してくる。避けきることなど不可能だ。先程の時点で目で追えなかった姿が今の状態でようやく視認が可能なのに、これ以上スピードが上がればその先に待っているのは今度こそ本物の死だ。

「う、うおおおおおおおおおおお！！」

自分でもよく分からない雄叫びを上げながら刀を振りぬく。

金属音が響いて、刀から腕にかけて衝撃が走る。運よく刀身が向この剣とぶつかってくれたようだ。

（くそ！どうする、どうする！どうすればいい！！）

ついにここにきて甲の混乱は頂点に達する。自分の力が急に倍加した事にもまだ、頭が追いついていないのに敵までもが力を倍加し、速度を上げてきたのだ。混乱すると言うのが無理な話だ。

ズパツ！！

そして、その隙を突かれた甲は肉が斬れる音と共に鮮血を舞わせていた。

「ぐあー！」

痛烈な痛みが全身を襲う。

その痛みを無理やり気力でねじふせて、突貫する。単純だが攻撃した後は隙がでやすいからな。

「くっ！？」

案の定、こちらに向きを変えようとした時にバランスを崩したのだろっふらついているのが見える。

確かに、ウェルデダンは一流の武人だがいくらそうであっても冷静さを欠いている今は隙が皆無とはいえない。

甲は、勢いはそのままに刀を振り下ろす。その瞬間に刀に『願い』

を込める。『遍く全て斬れてしまえ』と。

その『願い』は魔力となり、刀を強化し、ウエルデダントを剣ごと斬り裂こうとする。

「きゃあああああ?!」

だが、ここで予想外の出来事が起こる。

まず、急に曇天となり周りに満ち溢れていた活気が、生気が一気に消滅した。

「ど、どうしてあなたが!!」

ウエルデダントが驚愕の声をあげた、その視線の先には、

「・・・不甲斐ない部下の処罰のためにだ」

次に、いつの間にか漆黒の魔力を身にまとった。おおよそ、この世のものとは思えない力を持っていそうな男が立っていた。

「貴様が、使者の唯一の生き残りか」

その視線がこちらへ向く。

「お前が、魔王だな」

「その通りだ」

一目見た瞬間分かった。

こいつは、確かに今の力の制御がまだできていない俺では敵わない相手だと。

そして、同時に恐怖する。

こんなのが、まだゴロゴロと居るのかと・・・。

魔王は、動けない俺を一瞥すると

「今は、まだお前とは剣を交えたくはないのでな、ロキ」

ロキ? その名前は確か、北欧神話のトリックスターだ。

【ふん。私は確かにロキだが、心を入れ替えたのだ。貴様らに与^{くみ}したとしても、何も面白くはないだろうしな】

「心を入れ替えた、ね・・・。笑わせる。だが、今は貴様の相手を

している暇はない」

そう言つて、俺に背を向けウエルデダンテの方に向く。

「さて、貴様には厳罰が必要だろうな」

「な、なぜです！私は、貴方の障害の芽を摘もうと・・・っ！」

「新入りが入つてな、そいつにこの地を任せようと思つてな。つまり、お前はクビだ」

「な・・・っ！」

ウエルデダンテはその言葉を聞き、茫然となる。

それはそうだろう。今まで、忠誠を誓っていたのに、それを突然拒絶され、拳句殺すとまで言われたのだ。

俺は、絶句していた。

「では、さらばだ。良い夢を、亡国の王女よ」

「っ！あ、ああああああ！！！」

魔王の腕が振り下ろされそうになる直前、我に返ったウエルデダンテは魔力を弾丸にして撃ちだす、連射したためか、面攻撃となって魔王を襲う！

ズガガガガンッ！

「・・・っはあ！はあ、はあ・・・うそでしょ・・・」

ほぼ全弾命中したにもかかわらず、びくともしない魔王を茫然と見上げるウエルデダンテ。それを甲は、何処か遠い景色のような気持ちでしか見られなかった。明らかに常識を超える量の魔力の直撃を受けたにも関わらず、びくともしていない魔王にも、今その魔王に殺されそうになっている女盗賊にも自分は勝てない、と思つてしまつていた。

【それは間違いだ。人間と言つのは進化する生き物だ。故に、おもしろい。故に、魔王を倒す可能性を秘めている】

「・・・？」

どこか哀愁を漂わせるロキ(?)の声で、我に返る。

【己の剣を取り、魔王に示すがいい。お前の敵は、この俺だと】
「だけど・・・」

【今のお前は、気持ちで負けているだけだ。それに敵とはいえ、目の前で女が殺されるのは主義に反するのではないかな?】
確かにそれもそうだ。

騎士道精神じゃないが、あの魔王が男の俺よりも女の魔神を殺す事を優先させているのは気に食わない。あれじゃまるで、俺には背を向けても余裕で対処できると言われているみたいだ。

「気が済んだか? ウエルデダンテ」

「・・・そうね、諦めるわ」

ウエルデダンテは、降参と言って手を振る。

「そうか。では、今度こそよい旅路を」

そうして、今度こそその必殺の腕がウエルデダンテを切り裂くはずだった。

ガキイインッ!!

「む、ぐっ・・・!!」

かなりの重さを伴った一撃をもらった。

「っりゃあー!!」

鏑迫り合いした後、すぐに斬りこんだが、手ごたえはあったものの全く斬れていない。

「なるほど、こりゃ魔王と呼ばれるだけあるわ」

後ろに大きく下がりながら、努めて冷静にばやく。内心は、尻尾まいて逃げ出したいほどだったが・・・。

「・・・よかるう、余興だ。お前が勝ったら、ウエルデダンテは見

逃そう」

「はあ！？ど、どうして私が景品みたいになってるの！！」

「ちよっと、静かにしてくれ。集中したいんでね」

「・・・ふ、気合は十分か。魔神を宿す人間よ」

「ふざけるっ！！」

ズダンッ！

踏み込むのと同時に剣をふるう。

ギヤイン！

ハンマーが何かで金属を叩いたような音がしたにもかかわらず、魔王はびくともしていない。それどころか、苦笑いしている。

「なんだ？その程度か？なら、お前の相手はしてやれんな」

「——っ！！」

完全に見下されたその言葉に、この世界に来てからの怒りとか、理不尽な願いとか、運命とかにいら立って、結構ピークに来ていたストレスが完全にオーバーフローした。

「いい目だ。それでこそ、殺しがいが有る」

「——す」

「なんだ？」

「殺す」

「出来るならな」

「灼熱の赤。紅蓮の煉獄にお前を誘おう——」

怒りで我を忘れてしまいそうになるのを必死に抑え、ナナの特性である”七属性の忌剣”を内のひとつを発動する

「——忌剣・”紅”一の太刀」

忌剣には、属性一つに対して七の太刀まである。これらすべてを含めてナナの能力だ。つまり、主人公の命名はある意味において、物凄く的を得た名前だった。

そして、紅。

その一太刀は、全てを燃やしつくす横薙ぎの一撃。

それは、周囲の木々たちも巻き込み魔王をも呑み込んだ。

(15)「エルガルド編」魔王登場(後書き)

・・・あれ？

メル「どうかした？」

お前出てなくね？

メル「出してくれないんじゃないん？」

・・・いやまあ

というか、俺って次でバトル終わりのこと言わなかった？

メル「・・・さあ？」

いやいやいや、もしそうなら大変なことになるよ？

メル「告知違反ね。どこかの政治家みたい」

こら。そういうデリケートな話題をギャグにするな

メル「それがメルクオリティ」

そんなクオリティ求めてないし、需要ねえヨ

メル「作ればいいじゃない」

無理だろ・・・

そうそう、作者は最近ペンタブを買おうと思ってるんだが・・・
絵の描きやすい奴でできる限り易いのってないかな？

メル「そんな都合のいいのあるの？」

あるかもしれندらう

ナナ「そんな虫のいいことがあるわけなからう」

く、ナナは引つ込んでろ。

ナナ「じゃあ、貴様も退場じゃな」

ふ、甘く見ないでもらおう

メル「え？」

ナナ「な」

これでも、運動神経はそこそいいほうなのだよ！

メル「へへ」

ナナ「じゃが、人外に勝てるのか？」

ムリデスヨネ」

ナナ「では、いくぞ」

ドナドナ」ドナド・・・orz

メル「さて、作者の心が折れる音が聞けたところで今回はこの辺で
す」

ナナ「ではまたの」

16話：未定（前書き）

題名きめられなかった・・・

甲「ひさしぶりに出てきたと思ったら、・・・ふざけてるだろw」
だって、・・・

甲「二次創作はやってるのにな？」

織田。奈の野。とかの話しか？

甲「そうだよ」

戦闘描写は考えるのは得意だが、日常描写ってむずかしいよね

甲「戦闘にしても、文章にするの下手じゃねーか」

・・・

それは言わないお約束

16話：未定

「紅蓮天翔」！！」

甲が技の名前を吼えながら突貫すると同時に魔王の周囲の空気が蒸発しながら熱波となつて魔王を襲う。

「なに！？」

さすがに空気を燃やされては、まずいのか怯む。

しかし、それも一瞬のこと。

「おかしな技を使うようだな。部下たちが撤退する理由もわかる」
「おかしな技といわれる。当たり前だ、今即興で考えた名前なんだから。多分なんかのゲーム化小説、漫画の類の技がごちゃ混ぜになつた感じだな。」

しかし、自分の周りの酸素が奪われてるのに妙に落ち着いている。

いや、この世界に俺たちと同じく、人は酸素を吸って生きているなんて言う常識があるとは思えないが、一応鼻が付いているということとは何かを吸って生きているんだろう。ならばそれが燃え尽きてしまえば、奴の命は風前の灯だ。

だから、何も恐れる必要はない。

だというのに、どうして体が震えてやまないんだろうか。

弱点を突いているはずなのに、人の形をしている何かに脅えている。

「人の理が、魔王である俺に通じるとでも思っていたのか？勘違いも甚だしいな」

確かにそれはそうだ。

だが、姿かたちはどう見ても人間だ。

この世界の住人だ。

ならば多少は、効果があるのではないかと思つてしまったのだ。

つまり、こちらは無闇に手札を一つさらしたことになる。

全く、勘弁してほしい。

何とかしなくてはならない、この場を乗り切るために使つたのに今

や逆にピンチだ。

手札の数が減ったうえに、周りを焼いてしまっているので逃げるに逃げれない。

「何をぼんやりしているんですか」

「王女の言うとおりだな、何も貴様一人ではなからう」

「二人の言う通りですね。主は一人で抱えすぎです。もうちょっと、肩の力を抜いても誰も怒りませんよ」

メルとエルベさんが魔王と俺の間に立ちふさがり、王女が俺の体の手を添えて回復してくれる。RPGじゃないからHPを回復してくれるわけではないが、けがを治療してくれるのはありがたい。

「ふん、下らん。この程度なら、相手にする価値もない。これ以上時間をかけても無駄か・・・」

そついうと魔王は踵を返し、この場を立ち去ろうとする。

「ま、待つて！」

その魔王にウエルデダンテが声をかける。しかし、

「おまえはすでに私の配下ではない。どこへなりと消えるがいい」

「・・・っ・・・!!」

そちらに見向きもせず、そう返すと自分の目の前の空間を歪め消えていった。

「・・・なんだったんだ、畜生め」

「さあ？ただ、見逃してもらったというよりも興味がなくなったみたいなのを言っていましたよね」

「そだね」

魔王が去ったあとをしばらく茫然と眺めていた俺たちは、そんなことしか言えなかった。夜の間に出来たはずなのに、空は白んできていた。にしても、今回の戦いで俺に関するなぞが増えたな。内側に居る存在、ロキ。こいつはたしか、悪神だ。北欧神話で『神々の黄昏^{レク}』を引き起こしたと言われていた気がするが……。正直言えばぞっとしない話だ。俺の中にそんなものが入っているなんてな。。。

そして、何よりもウエルデダントの今の姿。打ちひしがれているようだ、戦闘中に魔王が言っていた『亡国の王女』とやらが何か関係しているのだろうか？

そんな風に考えていた俺に突然、ウエルデダントが話しかけてきた。

「……聞かないの？亡国の王女について……」

「……。今のお前の顔を見て、何か聞けるとしたら大丈夫かどうかだな。かなりひどい顔してるぜ」

「言い方はあれだが、今回は貴様に同意してやろう」

エルベさんなんかキヤラ変わった？俺にいやに厳しいんですけど？

「気のせいだ」

『細かいことを気にするでないわ、阿呆が』

「細かいか……。まあ、いいや。それで話してくれるのか？」

「別にかまわないわ。私にはあなたについていくしか道はないもの」

「……うん？どうして、俺についてくること確定なの？いやだよ、

これ以上厄介な人増えるの……。何言っても付いてくるからだろうから、何も言わないけどさ。

「そこまで難しい話じゃないわよ。私は魔王に自分の祖国をつぶされ、先祖伝来の地を取り返すためにあいつのもとで戦っていた。そして私は、その国の王族の生き残りってわけ」

眉根にしわを寄せて考え込んでいた俺の姿を何か勘違いしたらしく、

苦笑いしながら簡潔に話してくれた。その笑顔ははかなくて、今にも消えそうだった。

「・・・そうか、そりゃなんというかご愁傷様だな」

「ほんと、そうよね。中途半端に復讐なんか企んで、結局看破されて玉砕覚悟で突っ込んだのに負けて、従わされて・・・。結局、何もできやなかった」

「さて？何もできなかったわけではないだろ、お前は負けたけど生きている。それはつまり、奴の賭けなんじゃないか？自分の手元に置いておき成長し、寝首をかきに来るのか待っているんだろうよ。スリルでも楽しんでるんだろ」

「なに、それ、馬鹿じゃないの？」

「うるさいなあ。別に面倒になったらとりあえず、他人に押し付ければいいんだよ」

「最低野郎だの」

「・・・」

若干、ショックを受けつつもなんとかポーカーフェイスを貫く。べ、別に傷ついてないもん・・・。

「それよりも、あなたのその能力なんなのよ？」

「ま、とりあえず野宿の準備でもしよーぜ。しながら話すよ・・・。俺の本当の親とお役目について」

16話：未定（後書き）

甲「おい」

ナニ？

甲「お粗末にもほどがあるぞ」

わかってるよ

甲「書き直した方がいいんじゃない？」

今は無理。

甲「プロット紛失事件？」

うん、だから新しい伏線

甲「お役目？」

ネタバレしちゃうと・・・嘘をいくつかつきます

甲「俺が？」

うん

甲「ほう、珍しくさえてるじゃない」

だろう？

とにかく、いろいろお粗末極まりないですが次からはきちんと書きます

甲「ああ、それと地震あっただろ？」

あったね、私の地域は無事だったが・・・

甲「震災にあわれた方には、謹んでお見舞い申し上げます」

一日も早い、復興ができるよう祈っております

被災した地方の方には頑張って復興してほしいです

甲「そうだな」

ではこの辺で

17話：過去の契約（前書き）

短めですが、最新話です

甲「本当に短いな」

あれだ、ちよつとした過去編？

甲「なるほど」

17話：過去の契約

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

荘厳な雰囲気のあるどこかの大聖堂。

そこに、二つの人影がある。

彼らは見つめあったまま微動だにしない。

「・・・・・・・・」

片方は、男をじーっと眺めている少年。

右手には片刃の直刀が握られている。

左手には鞘らしきものを握っている。

どこか、あきらめたように目の前の人物を見据える。

「・・・・・・・・」

もう片方は、そんな少年をにやにやとしながら見つめている。

彼は背に少年の背丈ほどもある大剣を背負っている。

腕は胸の前で組んでおり、隙だらけに見える。

目の奥には、確かな戦意を宿しているが、それを相手には気取られぬように少年を見据える。

「・・・・・・・・何か用ですか？」

「いや、何。君はどうしてこんなところにいる？」

にらみ合った状態が続いて数分が経過したところだろうか、突然少年が男に話しかけた。

「ここは君みたいなお少年がいていい場所ではないと思うんだが？」

「・・・・・・・・あなたの名前は？」

少年は男の声など聞こえないかのように、質問をする。

「俺？俺は、鮎川正樹だ」
あゆかわまさき

「そう」

「・・・君の名前は？」

「・・・・・・知らない」

「知らない？・・・親は？」

「殺した・・・と思う」

「思う？」

「見たことがないから、知らない」

「・・・そうか」

正樹は何となく悟った。

おそらくこの少年は、殺人兵器として育てられたのだろう。

そして、少年はその役目にふさわしい働きをしてきた。

だが、いつかは限界が訪れる。

それがたまたま今日になったのだろう。

「いや・・・『この世に偶然などありはしない』が口癖だったか・・・」

「？」

「？」

「なんでもない、こつちの話だ」

正樹がこの地を訪れた理由。

それは、とある組織を壊滅させること、だった。

しかし、それはすでに少年によって達成させられていた。

これは偶然だ。

だが、正樹の信頼する友曰く『この世に偶然などありはしない。あ
るのは必然のみ』。

ゆえにここで彼らが出合ったのも必然なのだろう。

そして、これが彼らの最初の邂逅。

だが、これは始まりではない。

あくまで、これは『鮎川甲』あゆかわこうの物語。

ゆえに、

「じゃあ、おまえさんなんか名前みたいなのはないのか？」

「・・・ある」

これは

「ほう？なんだよ？」

「この刀の名前」

『鮎川甲^{あゆかわこう}』という人間が知る由もないお話。

「・・・ナナ」

言った瞬間気配が反転する。

これは彼女とそして

「そして、私がロキだ」

悪戯好きの魔人がどうしてただの人間を見守っているのか。

「おう、何だか知らんがよろしくな」

その原因の一部。

17話：過去の契約（後書き）

過去編です

メル「垂れ流しただけじゃない」

うるさいわ、ここからなんとかするわ

甲「できるのか？」

知らん

甲「無責任すぎるだろ?!」

だが、安心しろ

メル「何を？」

本気になった作者はすべてを凌駕する!!

甲「つまり、壊れたんだな？」

メル「ああ、病んだのね」

フハハ

ナナ「本格的に駄目じゃの」

フヒヒ

甲「某おたく主人公みたいな笑いはやめろ」

メル「最後かつこよすぎよね、あれ」

甲「正直、だれてめえwって感じだな」

ナナ「まあ、あれだけのことでやられたら変わるじゃろ」

まあ、それはともかく

甲「なおったか」

初めから壊れてないわ！大事なところは

メル「いいから次の予告！」

ああ、うん・・・

甲「なんだよ」

いやね、正直ネタバレすると今回出てきたロキとナナは今主人公が持っているロキとナナとは若干違います。そして、正樹についてですが・・・

甲「親父が？」

人類最強系です

甲「え？」

いや、ね。『壊し屋』なのよ彼

ちなみに奥さんいますよ？

ナナ「その子が、今の甲じやの」

じゃあ、この少年はなんだ？って話になるわけだが

甲「ふんふん・・・」

まあ、今の段階では謎だ

甲「ですよねー」

メル「わかつたら逆に困るわ」

そういうことだ

とりあえず物語への関係性でいうと、大だな

甲「ほう」

まあ、続きを楽しみにしてください」

では、このあたりで

メル「やっぱりとがき書きやす！」

文体とか人称とか気にしなくていいじゃん

甲「確かにな」

メル「だけど、これはこれでいやよね」

自演乙、だな

ナナ「まさに正鵠を射ているのう」

ダマレババア

「忌剣・・・三の太刀”紅朱雀・陰”」

おい、ばか、やめ」

ナナ「さて、作者急病のため今日はここまでじゃ」
メル・甲「ガクガク、ブルブル」
ナナ「また会おうぞ、皆の衆」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8125j/>

異世界漂流記

2011年10月6日01時27分発行